新古今和歌集 下

石[illegible]文庫

新古今和歌集巻第十一

恋歌一

題不知　　　読人不知

よそにのみ見てややみなん葛城やたかまの山の峯の白雲

音にのみありときゝこしみよしのゝ瀧はけふこそ袖に落けれ

人丸

足引の山田もる庵におく蚊火の下こかれつゝわか恋らくは

石上ふるのわさ田のほには出す心のうちに恋やわたらん

女につかはしける　在原業平朝臣

春日野の若紫のすり衣しのふの乱れかきりしられす

中将更衣につかはしける　延喜御哥

紫の色に心はあらねとも深くそ人を思ひそめつる

中納言兼輔

みかの原わきてなかるゝ泉川いつみきとてか恋しかるらん

平貞文家哥合に　坂上是則

その原やふせやにおふるはゝき木のありとはみえてあはぬ君哉

人のみつかりして侍ける夜にそへて女に

つかはしける　藤原高光

[illegible]の心はそことたのまれぬ世は吹けり

九条右大臣女にはしめてつかはしける　西宮前太政大臣

年月は我身にそへてすきぬれと思ふ心のゆかすもあるかな

返し　大納言俊賢母

かはらしといはすは人の思ひまさてとおもひ(ぬく)袖と我のみや

天暦御時歌合に　中納言朝忠

人伝てにしらせてしかなかくれぬのみこもりにのみ恋やわたらん

はしめて女につかはしける　太宰大弐高遠

みこもりの沼の岩かきつゝめともいかなるひまにぬるゝ袖そ

いかなる折にかありけん女に　謙徳公

唐衣袖に人めはつゝめともこほるゝものは涙なりけり

左大将朝光五節舞姫たてまつりけるかしつきをみてつかはしける　前大納言公任

天津空とよのあかりにみし人のなを面影のしひて恋しき

つれなく侍ける女にしはす晦日につかはしける　謙徳公

わか玉の緒にはまかせくみつもりと我そこしめむ逢坂の関

堀川関白文おこせて里はいつくそと
とひ侍りけれは　本院侍従

我宿はそことなにかをしへきいはてこそみめ尋けりやと

題しらす

忠義公

わかおもひ空の煙となりぬれは雲ゐなからも猶尋てん

題しらす

貫之

しるしなき煙を雲にまかへつゝ世をへてふしの山ともえなん

ゆかりやふ

煙たつおもひならねと人しれすわひてはふしのねをのみそ泣

女につかはしける　藤原惟成

風吹は室の八島の夕煙心の空にたちにけるかな

みちのくにまかりける女におなし司のみちなるに
ふとかくてつかはしける　藤原義孝

白雲のまよひもおもとかよふらんしらかはのみちのくの葉と

題しらす　いつきさふ

きのふもみえしやかふきされ尋もをさしも我のともえや流ん

源重之

筑波山はやましけ山しけゝれと思ひ入にはさはらさりけり

又かよふ人ありときける女のもとにきし夢

大中臣能宣朝臣

我ならぬ人に心をかけたらは山下にゆかんみちにやなき
ましめて女まつりけり

大江匡衡朝臣

人志れはこふらんは足曳乃山下水のわきやかへらん
女を猶しにかのふみそへつかはしける

清原元輔

匂ふらん霞のうちの桜花思ひやりてもをしき春かな
年へていひわたりける女のはすかに春
ちかふはおほくさりけるに春れはまたおもひつくさいひ
おこしけり

能宣朝臣

いつくより咲ちる花となかめつゝ惜思ふ春にあかすらん
あいしして　三つ孫

打山乃みねとひこゆる初雁はなかなかに音こそやみかん

亭子院御製

大空を渡る春日の影なれやよそにのみしてのどけかるらん
正月雨ふり風吹ける日女につかはしける

猶徳云

春風の吹にもまさる涙かな我水上も氷とくらし
年ひく返事せぬ女なり

水の上にうかへる鳥の跡もなくおほつかなさを思ふ比
題しらす　曾禰好忠
片岡の雪まにねさす若草のほのかにみてし人そ恋しき
返しせぬ女の許につかはさむとて人のよま
せ侍けれはいさゝかしき計によみ侍ける
和泉式部
跡をたに草のはつかにみてしかな結ふ計の程ならすとも
題しらす　藤原興風
霜のうへに跡ふみつくる浜千鳥ゆくへもなしとねをのみそなく
中納言家持
秋萩の枝もとをゝに露の今朝消ぬとも色に出めや
藤原高光
秋風に乱て物は思へとも萩の下葉の色はかはらす
志のふ草の紅葉したるに付て女の許に
つかはしける　花園左大臣
わか恋もいまは色にや出なまし軒のしのふも紅葉しにけり
和歌所歌合に久恋といふことを
摂政太政大臣
石上ふるの神杉ふりぬれと色には出す露も時雨も
小野家歌合に忍恋の心を

太上天皇

我恋は槙の下葉にもる時雨ぬるとも袖の色に出めや

百首歌奉りしに恋のうた

前大僧正慈円

わか恋は松を時雨の染かねて真葛か原に風さはくなり

家に歌合し侍りけるに夏恋の心を

摂政太政大臣

空蝉の鳴ねやよそにもりの露ほしあへぬ袖を人の問まて

寂蓮法師

思ひあれは袖に蛍をつゝみてもいはゝや物を問人はなし

水無瀬にて恋の十五首歌合に

よみ侍しに

太上天皇

思ひつゝ経にける年のかひやなきたゝあらましの夕暮の空

百首歌中に忍恋を

式子内親王

玉の緒よ絶なは絶ねなからへは忍ることのよはりもそする

忘てはうち歎かるゝ夕かな我のみ知て過る月日を

我恋は知人もなしせく床の涙もらすなつけの小枕

百首歌よみ侍けるとき忍恋の心を

後法性寺入道前関白太政大臣

世の中にこひのひまハなきをしれ人をとかく捨ハ涙也けり

冷泉院みこの宮と申ける時さふらひ
ける女房をみかハしていひわたり侍ける比
手ならひしける所にまかりて物にかきつけ
侍ける　　謙徳公

つらけれとうらみんとハ思ほえす猶ゆくさきを頼む心に

読人しらす

あふ事ハたのまれかしめ頼まれハかなしき人とそ人ハみえける

貫之

風吹ハとハに波こす礒なれやわか衣手のかハく時なき

道信朝臣

世ゝのかされなきけ衣にそへのこさくハ我身にしみけり

くす玉を女につかはすとて男にかはり
て　　三条院女蔵人左近

沼ことに袖そぬれけるあやめ草心ににたるねをもとむとて

五月五日馬内侍につかはしける

前大納言公任

時鳥いつかと待しあやめ草けふハいかなるねにかなくへき

返し　　馬内侍

五月雨ハ空おほれする時鳥時になくねハ人もとかめす

并未作よ給ける時五月斗ふよそなり
らねやそめて侍りける

法成寺入道前摂政太政大臣

時鳥聲をハきけと花のえにまたふミなれぬものをこそ思へ

返し　馬内侍

郭公しのふるものを柏木のもりても聲のきこえけるかな

時鳥なれつるさとにやとりせハ

ゆゑにかくて時鳥人のめなれねとなけれ

題しらす　いせ

みくまのゝ浦よりをちに漕舟の我をハよそにへたてつるかな

難波かたみしかきあしのふしのまもあはて此世をすくしてよとや

人丸

ほのほのとあかしの浦の朝霧に嶋かくれ行舟をしそ思ふ

読人しらす

うら濱のうとみぬやハ世をハつ波のよるへしらぬもあはれとそ思ふ

東路乃佐野乃舟はしかけてのみ思ひわたるを知る人のなき

ふこり河のせまくもとこそかくりあいそめの氣とみ堂

時雨にハ冬木乃葉乃やハ斗すそ穂にぬ人乃袖ハあはりける

かりとのゝ色にさつつ川をてハ袖よりきともみえん

冬至木葉と吹返誰ハ見とこそいへ

我袖にあとふみつけよ濱千鳥逢ふことかたし見てもしのはん

女の許より帰りまうて来て遣はしける

に侍りけれは　中納言兼輔

たれよの淵によるへく我そなれぬるとけぬ恋の氷れる

題しらす　藤原元真

数ならぬ心をよせぬ名の池に我涙てそあまた堤の一股

涙川身もうくはかりなかるれときえぬは人の思ひなりけり

女につかはしける　実方朝臣

いかにせん久米路の橋の中空にわたしもはてぬ身とやなりなん

女の枕の宣をぬすみてかへしやるとて遣はしける

誰そこのみわのひはらもしらなくに心の杉の我をたつぬる

題しらす　小弁

我恋はいはぬ計そ難波なるあしのひの下にこそたけ

いせ

わか恋はありその海の風をいたみしきりによする波のまもなし

人につかはしける　藤原清正

しほ海の浦にかきたれつむりかなしき心を下にこそあれ

題しらす　源景明

あふ事をなきさにしよする白波のまちてあるへき我身なりけり

貫之

足曳の山下激つ岩なミの心くたけて人そ恋しき

あし引乃山下しけき夏草のふかくも君を思ふ比かな

坂上是則

なつしゝ梅と衣の草乃原をわけし志き人恋ちはまさるかな

曽祢好忠

蚊遣火乃さよふけかたの下こかれくるしや我身人しれすのミ

ゆらのとを渡る舟人かちをたえ行衛もしらぬ恋の道かな

鳥羽院御時うへのをのことも風によする恋といふ心をよみ侍けるに

権中納言師時

おひ風に八重のしほちを行舟のほのかにたにも逢見てしかな

百首哥奉し時　摂政太政大臣

かちをたえゆらの湊による舟のたよりも志らぬ奥津塩風

題しらす　式子内親王

しるへせよ跡なき波に漕舟の行衛も志らぬ八重の塩風

権中納言長方

紀の国やゆらの湊にひろふてふたまさかにたに逢見てしかな

法性寺入道前関白太政大臣家哥合に　権中納言師俊

つれもなき人の心はうきにはふあし下ねのねをこそはなけ

和哥所哥合に忍恋といふことを
摂政太政大臣
難波人いかなるえにか朽はてんあふことなみにみをつくしつゝ
隠名恋といふことを
皇太后宮大夫俊成
あまのかるみるめを波にまかへつゝなくさの浜をたつねわひぬる
題しらす
伊勢
逢までのみるめかるへき方そなきまたなみなれぬ磯のあま人
業平朝臣
みるめかる方やいつくそさほさして我におしへよあまの釣舟

新古今和歌集巻第十二
恋哥二
五十首哥奉りしに寄雲恋
皇太后宮大夫俊成
下もえに思ひきえなん煙たにあとなき雲のはてそかなしき
摂政太政大臣家百首哥合に
藤原定家朝臣
なひかしなあまのもしほ火たきそめて煙はそらにくゆりわふとも
百首哥奉りし時恋哥
摂政太政大臣

恋をのみすまの浦人もしほたれほしあへぬ袖のはてをしらはや

恋の哥とてよめる　二条院さぬき

見るめこそ入ぬる磯の草ならめ袖さへ波の下に朽ぬる

年をへたる恋といへる心をよみ侍ける　俊頼朝臣

君こふとなるみの浦の浜ひさきしほれてのみも年をふるかな

忍恋の心を　前太政大臣

しるらめや木葉ふりしく谷水の岩まにもらす下の心を

左大将に侍ける時家に百首哥合侍けるに

忍恋の心を　摂政太政大臣

もらすなよ雲ゐる峯の初時雨木葉は下に色かはるとも

恋哥あまたよみ侍ける　後徳大寺左大臣

かくとたにおもふ心を岩瀬山下行水の草かくれつゝ

殷富門院大輔

もらさはやおもふ心をさてのみはえそ山しろのゐてのしからみ

忍恋の心を　道因法師

恋しともいはゝ心のゆくへきにくるしや人めつゝむおもひは

みましてあはぬ恋の心をよめる

花園左大臣

人しれぬ恋に我身ハしつめともみるめにうくハ涙なりけり

題しらす　神祇伯顕仲

物思ふといはぬ斗ハ忍ふともいかゝハすへき袖のしつくを

忍恋の心を　清輔朝臣

人しれすくるしき物ハしのふ山下はふ葛のうらみなりけり

和歌所歌合に忍恋の心を

雅経

きえねたゝ忍の山の峯の雲かゝる心のあともなきまて

千五百番歌合に　左衛門督通光

限あれハ忍の山のふもとにもおちはか上の露そ色つく

二條院さぬき

うちはへてくるしき物ハ人めのみ忍のうらのあまのたくなハ

和哥所哥合依忍恋といふことを

東宮権大夫公継

忍はしよ石まつたひの谷川もせをせくにこそ水まさりけれ

題しらす　信濃

人もまたふみみぬ山の岩かくれなかるゝ水を袖にせく哉

西行法師

遥なる岩のはさまに独ゐて人め思はて物思はゝや

数ならぬ心のとかになしはてし志らせてこそハ身をも恨め

永承四年十五番歌合に夜恋を

摂政太政大臣

草ふかき夏野わけゆくさをしかのねをこそたてね露そこほるゝ

入道前関白右大臣に侍りける時百首歌

人々によませ侍りけるに忍恋の心を

太宰大弐重家

後世を歎く涙といひなして志ほりやせまし墨染の袖

大納言成通文遣しけれとつれなかり

ける女を後世まて恨のこるへきよしや

申けれは

読人不知

玉つさのかよふ斗になくさめて後世まて恨のこすな

前大納言隆房中将に侍りける時右

近馬場の日をりの日まかれりけるに物

見侍りける女車よりつかはしける

ためしあれはなかめはそれと知なからおほつかなきは心なりけり

返し

前大納言隆房

いかなれや心やゆきて志るへするなかむるかたを人の問まて

千五百番歌合に　左衛門督通光

なかめ侘ぬそれとはなしに物そ思ふ雲のはたての夕暮の空

雨乃降日女につかはしける

皇太后宮大夫俊成

思ひあまりそなたの空をなかむれは霞を分て春雨そ降

水無瀬恋十五首歌合に

摂政太政大臣

山賤のあさのさ衣をさをあらみあはて月日や杉ふける庵

歌合出恋といふこゝろを

藤原忠定

今はいそ月日は杉の門さすれはいつゝ思ひのへさ

百首歌奉りし時

俊成卿

逢ことはかたのゝ里のさゝの庵しのに露ちるよはの床

入道前関白右大臣に侍ける時百首歌

中に忍恋

ちらすなよしのゝ葉草のかりにても露かゝるへき袖の上かハ

題しらす

藤原元真

白玉か露かとゝはむ人もかな物思ふ袖をさしてこたへん

女につかはしける

藤原義孝

いつまての命もしらぬ世中につらき歎きのやますもあるかな

崇徳院に百首歌奉りけるに

大炊御門右大臣

我恋はちきのかたそきかたくのみゆきあはて年のつもりぬるかな

入道関白家に百首哥よみ侍ける時不遇
恋といふ心を　藤原基俊朝臣
[illegible]
夕恋といふことをよみ侍ける
藤原秀能
もしほやくあまの磯屋の夕煙たつ名もくるし思ひ絶なて
海辺恋といふことをよめる
定家朝臣
すまのあまの袖に吹こすしほ風のなるとはすれと手にもたまらす
摂政太政大臣家哥合によみ侍る
寂蓮法師
ありとてもあはぬためしの名取川くちたにはてねせゝの埋木
千五百番哥合に　摂政太政大臣
[illegible]名取川せゝの埋木[illegible]
百首哥奉し時　二条院さぬき
涙川たきつ心のはやきせをしからみかけてせく袖そなき
摂政太政大臣百首哥よみ侍けるに
高松院右衛門佐
よそなからあやしとたにも思へかし恋せぬ人の袖の色かは
恋哥とてよみ侍ける

読人不知

思ひあまりねつゝ涙をせきとめてかさゝ袖にあふれなれ(ともれ)

入道前関白太政大臣家歌合に

道因法師

ねよ涙のなかれなりけりとしてしほれまさる袖にとまるや

百首歌中に 式子内親王

夢にても見ゆらんものを歎きつゝうちぬる宵の袖のけしきは(こそ)

こひ侍りける女の夢に見えて侍りければ

よみ侍りける 後徳大寺左大臣

覚て後夢なりけりと思ふにもあふは名残の惜しくやはあらぬ(ゆか)

千五百番歌合に 摂政太政大臣

身にそへるその面影も消えななむ夢なりけりと忘るゝ斗に

題しらず 大納言実宗

夢路にもあふてみえつゝ覚てそ離面影うらし袖の露(けり)

五十首歌奉りし時 前大納言忠良

たのめおきし浅ちか露に秋かけて木葉降しく宿の(通路)

寄河恋といふことを 正三位経家

思ひあまり天の川せをよそにせんせめては秋と忍ぶ風に

とたに夕ひと待といふらんと

鴨重政 保し

身のめてもあるけるこゝろ山のへの雲の下に消えん

摂政太政大臣百首歌合に

中宮大夫家房

逢ことはいつといふきのみねにおふるさしもたえせぬおもひなりけり

家隆朝臣

ふしのねの煙も猶そ立のほる上なき物はおもひなりけり

名立恋といふ心をよみ侍りける

権中納言俊忠

うきなのみ立田の山よりたつ雲の行末しらぬなかめをそする

百首歌に恋の心を

惟明親王

逢ことはむなしき空の浮雲は身をしる雨のたよりなりけり

右衛門督通具

我恋ハあふを限のたのみたに行末もしらぬ空のうき雲

水無瀬恋十五首歌合に春の恋の心を

俊成卿女

面影のかすめる月そやとりける春や昔の袖の涙に

定家朝臣

床の霜枕の氷消わひぬむすひもをかぬ人の契に

摂政太政大臣百首歌合に暁恋

有家朝臣

つれなさのたくひまてやはつらからぬ月をもめてし有明の空

宇治にて秋恋といふことを人々つか
うまつりしに　藤原秀能

袖のうへに誰ゆへ月はやとるそとよそになしても人のとへかし

久恋といふことを　越前

夜ゝのまくらひさしき衣のつまくも絶ぬおもひよむすほゝれつゝ

家に百首歌合し侍けるに祈恋といふ心
を　摂政太政大臣

いく夜われ波にしほれてきふね川袖に玉ちる物思ふらん

定家朝臣

としもへぬいのる契ははつせ山をのへのかねのよその夕くれ

祈恋の心をよめる

俊成女

うき身をはわれたにいとふいとへたゝそをたにおなし心とおもはん

題しらす　権中納言公経

恋しなむおなしうき名をいかにしてあふにかへつと人にいはれん

殷富門院大輔

あすしらぬ命をそおもふおのつからあらはあふ世をまつにつけても

八条院高倉

つれもなき人の心のうつせみのむなしき恋に身をやかへてん

西行法師

何となくさすかにおしき命かなありへは人やおもひしるやと

おもひしる人有明の世なりせはつきせす身をはうらみ
さらまし

新古今和歌集巻第十三

恋哥三

中関白かよひそめ侍けるころ

儀同三司母

わすれしの行末まてはかたけれはけふを限乃命ともかな

忍ひける女をかりそめなる所にゐてまかりて
帰てつかはしける　謙徳公

限なくむすひおきつる草枕いつこの旅をおもひわすれん

題しらす

業平朝臣

思ふにはしのふることそまけにけるあふにしかへはさもあらはあれ

人のもとにまかりそめてあしたにつかはしけり

謙徳公

昨日まてあふにしかへはとおもひしをけふは命のおしくも有哉

百首哥に　　式子内親王

逢ことをけふ松かえの手向草いく夜しほるゝ袖とかはしる

頭中将に侍ける時五節所のわらはに物申そめて後尋てつかはしける

源正清朝臣

恋しさにけふそ尋ぬる奥山の日影の露に袖はぬれつゝ

題しらす

西行法師

あふまての命もかなとおもひしはくやしかりける我心かな

三条院女蔵人左近

人心うす花そめのかり衣さてたにあらて色やかはらん

興風

あひみてもかひなかりけりうは玉のはかなき夢におとるうつゝは

實方朝臣

なかなかの物思ひそめてねぬる夜ははかなき夢もえやはみえける

忍ひたる人とふたり臥して

いせ

夢とても人にかたるなしるといへは手枕ならぬ枕にもせす

題しらず　　いつみしきふ

枕たにしらねはいはしみしまゝに君かたるなよ春の夜の夢

人よ物のひもしめて　　馬内侍

忘れても人にかたるなうたゝねの夢見て後もなからしよを

女につかはしける　　在原業平朝臣

浮かはしおもひ年は忘れて一夜の夢をはかなとそ見る

題しらず　　高倉院御歌

しるらめやいひもいてゝ夢のまにてなきえかへりつむ松坂の山

初会恋の心を　　俊頼朝臣

あし乃屋にたにも常なきはかなさやまたもとふらむとふ

題しらず　　読人不知

うきてある風にしをるゝ野への草枕露かゝるとも人よりかゝ

人しれて思ひけるとも又なりにちりすと

こゝけるを人によりしける

返し

いかにせんこゝろ吹秋風よ下葉の露みたれなき身を

あいしりて　　実方朝臣

鳴くさと二見の浦によるなみの袖のしぬまておきつ浦人

伊勢

逢ことの明日なからん明日まては我こそなさめやはかく

九月十日あまりの夜深く和泉式部か門を
たゝかせけるにきゝつけさりけれは朝に
つかはしける　　太宰帥敦道親王

秋のよの在明の月のいるまてにやすらひかねて帰りにしかな

人まちもあかぬ秋の夜すからなかめてすくしつるかな

題しらす　　道信朝臣

近江更衣にたまはせける

延喜御製

はかなくも明にけるかな朝露のおきての後そ消まさりけり

御返し　　更衣源周子

朝露のおきつる空も思ほえす消かへりつる心まとひに

題しらす　　円融院御製

をきそふる露やいかなる露ならん今は消ねと思ふ我身を

謙徳公

思ひわひしかもけりよりすくなきさはりつく菊は霜のやと

清慎公

むかし見のはれ衣ともちるらん今そ悲しかりける

夜乃秋女の許に侍りけるに人々まかりて帰りける夜

よ旅いてゝ待て帰て待けるよみ

侍ける　　藤原清正

短夜の残りすくなく深行はかねて物うき暁の空

女のもとにかよひそめて朝につかはしける

大納言清蔭

あくといへはしつ心なき春の夜の夢とや君をよるのみはみん

弥生の比夜もすから物語して帰り侍る

人の今朝はいとゝ物思はしきよし申つかはし

たりけるに　　和泉式部

今朝はしも歎きもすらんいたつらに春の夜一夜夢をたに見て

題しらす　　赤染衛門

心からしはしとつゝむものからに鴫の羽かきつらき今朝哉

忍ひたる所より帰りてあしたにつかはし

ける　　九条入道右大臣

侘つゝも君か心にかなふとて今朝も袂をほしそわつらふ

小一条家にまかりきしける

亭子院御歌

手枕にかせる袂の露けきはあけぬとつくる涙なりけり

題しらす　　藤原惟成

しはしまてまた夜はふかし長月の有明の月は人まとふ也

前栽の露をきたるをとらみなりけるに

と申つかはしける女に

実方朝臣

なきそへみは袖のみぬれそいとしく草葉の玉の数やまさらん

二条院に時あかつきかへりなんとするをと
いふとて　二条院さぬき

明ぬれとまたきぬ〳〵になりやらて人の袖をもぬらしつる哉

題しらす　西行法師

面影の忘らるましき別かななこりを人の月にとゝめて

後朝恋の心を　摂政太政大臣

又もこむ秋をたのむの鴈たにも鳴てそかへる春の明ほの

女のもとにまかりてこゝち例ならす侍けれは
帰て遣しける　賀茂成助

誰ゆへそ君よつまほ道芝の露のかとゝもに消なましは

女のもとに物をたにいはんとてまかりけるに
むなしく帰てあしたに

大納言朝光

消かへりあるかなきかの我身かな恨て帰る道芝の露

三条関白女御入内の朝につかはしける

花山院御製

朝ほらけおきつる霜の消かへり暮まつ程の袖をみせはや

法性寺入道前関白太政大臣家歌合に
藤原道経
庭におふる夕かけ草の下露や暮を待まの涙なるらん
題しらす　小侍従
待よひにふけ行鐘の声きけはあかぬ別の鳥はものかは
藤原知家
これも又なかき別になりやせん暮を待へき命ならねは
西行法師
有明は思ひ出あれや横雲のたゝよはれつるしのゝめの空
清原元輔
大井川井せきの水のわくらはにけふはたのめし暮にやはあらぬ
あふとちきりける人のもとへ同しく待を
まかりて
よみ人しらす
夕暮に命かけたるかけろふのありやあらすやとふもはかなし
西行法師すゝめて百首歌よませ侍りける
に
定家朝臣
あちきなくつらき嵐の声もうしなと夕暮に待ならひけん
恋歌とて
太上天皇
たのめすは人をまつちの山なりとねなまし物をいさよひの月
水無瀬にて恋十五首歌合に夕恋といへる

つらんを

摂政太政大臣

何ゆゑと思ひもいれぬ夕だに待出しものを山のはの月

寄風恋

宮内卿

きくやいかにうはの空なる風だにも松に音するならひありとは

題しらず

西行法師

人はこで風のけしきも更ぬるにあはれに雁の音信て行

八条院高倉

いかゞ吹身にしむ色のかはるかなたのむる暮の松風の声

鴨長明

たのめをく人もながらの山にだにさよふけぬれば松風の声

藤原秀能

今こんとたのめしことを忘れずは此夕暮の月や待らん

待恋といへる心を

式子内親王

君待とねやへもいらぬまきの戸にいたくなふけそ山のはの月

恋歌とてよめる

西行法師

たのめぬに君くやと待宵のまのふけゆかでたゞ明なましかば

定家朝臣

帰るさの物とや人のながむらんまつ夜ながらの有明の月

題しらず

よみ人不知

君こんといひし夜ごとに過ぬればたのまぬ物の恋つゝぞふる

人丸

衣手に山おろし吹て寒き夜を君きまさすハ独かもねん

たかね朔光久しく音経ゆきて猿なく雪
こさめしく枕乃うけまハ菊をしむてし
身つゝ小　　馬内侍

あふさかや河の猿なくなん茅に枕をならへけり
天暦御時またとはれまいらせて
　　女御徽子女王

なき行ハ浮世るれともなほ海のあまのなれやさき衣まとふ
逢てのちあひかたき女

　　坂上是則

秋の野ゝ草のにあふ絶まよりなくはしのたえ
三条院みこの宮と申ける時ひさしく
ととせ給ハさりけれは
　　安法法師女

よつ秋風にハ萩のこのはそよくそ汁の葉はそてにま
おもしらす　　中納言家持

足引の山のあらしにさそはれて露や河乃ん逢によとも
　　延喜御製

東路ゆうてふかねてなつかしきまゝなる露や河乃ん

権中納言敦忠

結ひそめし袂にかゝる花の露落くるとも身とはしらまし

百首哥中に　源重之

霧はよもとの涙のしぐれにぬれてへだてしとぞ思ふ

題しらず　安法々師女

独ふしてまてる宿の床のうへにかよひつゝものおもひけん

重之

山城のとはにうつることもありにさぞ袖ぬれまさるなかりけん

貫之

逢てふ人をも恋しとおもふれど思ふかひなき身のうさにして

家にへだてける女をとゞめてひさしくなりにけるに

ことなる男のいひわたりけるをきゝて

恨けるを女のもとにつかはしける

平貞文

偽と思ふ浪のはてにたゞよひて我と思へる

人はつらしや

鳥羽院御製

いつはりをたゞすのもりの木綿だすき身をも心もかけつゝぞ世に

汗思のみと

入道前関白太政大臣

我ありつることを思ふやおのこゝろもいまはかはらぬ世に

摂政太政大臣家百首歌合に

前大僧正慈円

たのめたとへハ人の偽を重てそ又もうらみめ

女ともし見んといひまハ侍りしやかて
返歌忘れておかれん給けれハつかはし
けれ

左衛門督家通

つらしとハ思ふものからふし柴のしはしもこりぬ心なりけり

女のむすめ給けり女まつふしと給へ
なとこりて久我内大臣のもとにつかはし
けり

読人不知

身のうさに忘れ斗とゝめ置くあさちか露と消なましを

返し

久我内大臣

袖にも誰かハ露を思ひおかん消ゆへき秋の有明にいはゝ
思しらす

小侍従

つらきをもうらみぬ我にならふなようき身をしらぬ人もこそあれ

殷富門院大輔

なにかいとふよもなからへしさのみやハうきにたへたる命なるへき

刑部卿頼輔

恋しなむ命ハ猶もをしきかなおなし世にあるかひハなけれと

西行法師

哀とて人の心のなさけあれな数ならぬにはよらぬなけきを

身をすてゝいりし人のうへは思ひなよ侍るかたみともおもて衲衣

女につかはしける　俊成卿

よしさらはのちのよとたにたのめおけつらさにたへぬ身ともこそなれ

返し　藤原定家朝臣母

たのめをかむたゝさはかりを契にてうき世中の夢になしてよ

新古今和歌集巻第十四

恋哥四

中納言に侍りける時女につかはしける

清慎公

よゐゝに君を哀と思ひつゝ人にはいはてねをのみそなく

返し　よみ人しらす

君たにもおもひ出けるよゐゝをまつはいかなる心ちかはする

少将滋幹につかはしける

恋しさにしぬる命を思ひ出て問人あらはなしとこたへよ

うしむかしと侍らはにまふてこしとち

しくしつく二日斗ありてつかはしける

謙徳公

別てはきのふけふこそへたてつれ千世をへたる心ちのみする

返し　恵子女王　贈皇后宮母

ゆめとしもなにかおもはん別し程のまよひに

入道摂政久しくまうてこさりけれは

びんかきて出侍りけるゆするつきの水さなから

侍るを見て　右大将道綱母

たえぬるかかけたにみえは問へきをかたみの水はみくさゐにけり

同し久しくおとつれたまはさりけるは五月五日

後朱雀院のはてまうに

陽明門院

こゝにきさわれはあやめ草かゝぬはなきや袖のしら玉

あいしらす

伊勢

言葉のかろふみにもあつかひていとしりまほし

右大将道綱母

吹風につけてもとはんさゝかにのかよひし道は空にたゆとも

こはいの宮ひさしく室にたちけるたる

つかはしける　天暦御哥

くもゐにおもはぬ我身も秋風の吹につけてはうらみつるかな

久しくまいらさりけるに人あり
延長御哥
寂しさやくのよ菊の葉に何く植なとゝ人めの枯まほしき
御返し　よみ人しらす
浅茅生の野辺やかるらん山賤のかきほの草は色もかはらす
春になりてと参し侍りけるをかはらすと
つまけれはからまりまくるをしまそゝおもしるかくとめ
のこゝろをせられけるお返しに楓の枝に
つましく
女御　厳子女王
かさねむは人さとしらすて時雨つゝ色は紅葉のもみちそめつゝ
御返し　天暦御哥
今こんとたのめつゝねる言の葉そときはにみゆる紅葉之ぬる
女御の志りふ侍けるにつかはしける
朱雀院御哥
玉かつら絶ぬるは道よ何をくれてて雲のうへにいかになかるらん
御返し　女御　熙子女王
思やる心はそらにあまるともなにゝかくもにかひなかるらん
麗景殿女御まいりて後雨ふり侍ける日
梅壺女御に　後朱雀院御哥
春雨のふりしくころか青柳のいとみたれつゝ人そ恋しき

御返し　　　　　　　　　女御藤原生子

青柳の糸ミたれたる此比ハ一すちにしも思ひよらまし

又御かへし　　　　　後朱雀院御製

青柳乃糸ハかしこくみたるとも（おもひ）そめてん色ハかハらし

御かへし　　　　女御生子

あさみとりふかくもあらぬ青柳ハ色にいてしといゝなまし

きやう揚やきる女まよひたるおもひをみたまへ

の日つかはしける　　　　実方朝臣

いまハ乃あふひと人ハいふとも梢のうへもみそしる

返し　　　　　　　　よみ人不知

枯はてるあふひのうらはにしくれ袋とそみえてやゝのまく（うき）

きかたる乃家にまつりける

天暦御哥

あふとみるかにみえし月影のおもかけやハ袋とそしる

角いしらす　　　　伊勢

ほしなやなハ梅山の吉野のつきとも梅をとふかれ

中務

いかにしても袋とふと秋の夜の月ハおなしたかせく（そみそ）

三孫

さとしなや山（の）よりかまての月もなくけのなつのはなのこ

読人しらず
天の戸をおしあけかたの月見れはうき人しもそ恋しかりける
わかのみ見し月を恋しとゆかされ雲ちの波におきて
人よつらしき　紫式部
入かたはさやかなりける月影をうはの空にもまちしよひ
かな　よみ人不知
いてゝゆく山のはをこそうらみつれ月の空にさしし月かけ
まいしらす　藤原経衡
今はとて別し程の月をたに涙にくれてなかめやはせし
肥後

面影のわすれぬ人によそへつゝ入をそしたふ秋の夜の月
後徳大寺左大臣
うき人の月はなにそのゆかりそと思ひなからもうちなかめつゝ
西行法師
月のみやうはの空なる形見にて思ひもいては心かよはん
くまもなき折しも人を思ひ出て心と月をやつしつるかな
物思ひてなかむる比の月の色にいか計なるあはれそふらん
八条院高倉
くもれかしなかむるからにかなしきは月におほゆる人の面影
百首歌の中に　太上天皇

しくれ行月とも見る袖の村雨につもるゝ山の端月は出けり

千五百番哥合に　摂政太政大臣

めくりあはん限はいつとしらねとも月なへたてそよその浮雲

我涙もとめて袖にやとれ月さりとて人の影はみねとも

権中納言公経

恋わふる涙や空にくもるらん光もかはる閨の月影

左衛門督通光

いくめくり空行月もへたてきぬ契し中はよその浮雲

右衛門督通具

今こんと契しことは夢なから見し夜に似たる有明の月

有家朝臣

忘れしといひし斗の名残とてその夜の月はめくりきにけり

題しらす　摂政太政大臣

思ひ出てよなよな月に尋すはまてと契し中や絶なん

家隆朝臣

忘るなよいまは心のかはるともなれしその夜の有明の月

法眼宗円

そのまゝに松の嵐もかはらぬよ忘やしぬるふけし夜の月

藤原秀能

人そうき頼めぬ月はめくりきて昔忘れぬ蓬生の宿

八月十五夜和哥所にて月前恋といふことを

摂政太政大臣

わくらはに待つるよひも更にけりさやは契し山のはの月

有家朝臣

こぬ人を待とはなくて待よひのふけゆく空の月もうらめし

定家朝臣

松山と契し人はつれなくて袖こす波にのこる月かけ

千五百番哥合に　俊成女

ならひこし誰かいつはりもまたしらてまつとせしまの庭の蓬生

経房卿家哥合に久恋を

二条院さぬき

跡たえてあさちか末になりにけりたのめし宿の庭の白露

摂政太政大臣家百首哥よみ侍けるに

寂蓮法師

こぬ人を思ひ絶たる庭の面のよもきか末そ待にまされる

題しらす

左衛門督通光

尋ても袖にかくへき方そなきふかきよもきの露のかことを

藤原保秀（季イ）朝臣

形見とてほのふみ分し跡もなしこしは昔の庭のをきはら（よもきふイ）

法橋行遍

なこりをハ庭の浅ちにとゝめ置て誰故君か住うかれけん

摂政太政大臣家百首歌合に

定家朝臣

忘れすハなれし袖もや氷るらんねぬ夜の床の霜のさむしろ

家隆卿

風ふかは峰にわかれん雲をたにありし名残の形見とも見よ

百首歌奉りし時

摂政太政大臣

いはさりき今こんまての空の雲月日へたてゝ物思へとは

千五百番歌合に

家隆朝臣

思出よたかゝねことの末ならん昨日の雲のあとの山風

二条院御時艶書の歌めしけるに

刑部卿範兼

忘れ行人ゆへ空をなかむれはたえ／＼にこそ雲もみえけれ

殷富門院大輔

忘れなハいけらん物かと思ひしにそれもかなはぬ此世なりけり

西行法師

うとくなる人を何とて恨むらん知られす知らぬおりもありしを

今そしる思ひ出よとちきりしハ忘れんとての情なりけり

建仁元年三月歌合に遇不逢恋の心を

あひ見しハ昔かたりのうつゝにてそのかねことを夢になせとや

土御門内大臣

哀なる心の闇のゆかりとも見しよの夢を誰かさためん

権中納言公経

契きやあかぬ別に露をきし暁はかりかたみなるへしと

右衛門督通具

恨侘待し今ハの身なれとも思ひなれにし夕暮の空

寂蓮法師

宜秋門院丹後

忘しの言の葉いかになりにけん頼めし暮ハ秋風そ吹

家百首歌合に

摂政太政大臣

思ひかねうちぬる宵も有なまし吹たにすさめ庭の松風

有家朝臣

侘てまたこゝろみむと思ふ[illegible]秋風そ吹

題しらす

よみ人不知

心にはいつも秋なる寝覚なれと身にしむ風のいく秋とこそ

西行法師

哀とて問人のなとなかるらん物思ふ宿の荻のうは風

入道前関白太政大臣家歌合に

俊恵法師

我恋は今を限と夕まくれ荻ふく風のをとつれて
ゆく

式子内親王

今はたゝ心の外にきく物をしらすかほなる荻の上かせ

家歌合に

摂政太政大臣

いつもきく物とや人の思ふらんこぬ夕暮の秋風の声

前大僧正慈円

心あらはふかすもあらなむよひ〳〵に人まつ宿の庭の松せ

和歌所にて歌合し侍しに遇不逢恋

寂蓮法師

里はあれぬむなしき床のあたりまて身はならはしの秋風そ吹

千五百番歌合に

太上天皇

里はあれぬ尾上の宮のをのつからまちこしよひも昔なりけり

有家朝臣

物思はてたゝ大かたの露にたにぬるれはぬるゝ秋の袂を

雅経

草枕結ひさためん方しらすならはぬ野への夢のかよひち

和歌所歌合に深山恋といふことを

前京家隆

さても猶とはれぬ秋の夕は山雲吹風も峯に見ゆらん

藤原秀能

思ひ入ふかき心のたよりまて見しはそれともなき山路哉

題しらす

鴨長明

詠てもあはれと思へ大かたの空たにかなし秋の夕くれ

五百番哥合に

右衛門督通具

ことの葉のうつりし秋もすきぬれは我身時雨とふる涙哉

定家朝臣

消侘ぬうつろふ人の秋の色に身をこからしの森の下露

摂政太政大臣家哥合に

寂蓮法師

こぬ人を秋のけしきやふけぬらんうらみによはる松虫の声

恋哥とてよみ侍ける

前大僧正慈円

我恋は庭の村萩うらかれて人をも身をも秋の夕暮

被忘恋の心を

太上天皇

袖の露もあらぬ色にそ消かへるうつれはかはる歎せしまよ

宮内卿

むせふともしらしな心かはらやに我のみけたぬ下のけふりは

家隆朝臣

しられしな袖にはかゝる色もなし夕暮と秋風

後成女

露はらふねさめは秋の昔にてみはてぬ夢にのこる面かけ

摂政太政大臣家百首歌合に夕恋

前大僧正慈円

心こそ行衛しらねみわの山杉の木末の夕暮の空

百首歌中に

式子内親王

はかなくも待し月日そうつりゆく空のけしきにまかせて

いきてよもあすまて人はつらからしこの夕暮をとはゝとへかし

暁恋の心を

前大僧正慈円

暁の涙や空にたくふらん袖におちくる鐘の音かな

千五百番歌合に

権中納言公経

恋わふと聞にたに聞け鐘の音にうち忘らるゝ時のまそなき

定家朝臣

尋みるつらき心のおくの海よしほひのかたのいふかひもなし

水無瀬恋十五首歌合に

雅経

見し人の面影とめよ清見かた袖にせきもる波の通路

後成女

ゆりよまかり河原ハ袖よ秋をきていひ汁を結ひせまた
なまひさし宿の庭のしのふかたの小萩か露の
むすほれつゝ

新古今和歌集巻第十五

恋歌五

水無瀬恋十五首歌合に

藤原定家朝臣

白妙の袖の別れに露落ちて身にしむ色の秋風そ吹く

家隆朝臣

思ひ入る身ハ深草の秋の露たのめし末や木枯の風

前大僧正慈円

野辺の露ハ色もなくてやこほれつる袖より過る荻の上風

左近中将公衡

恋侘て野への露とは消ぬとも誰か草葉をあはれとはみん

右衛門督通具

とふしにおもひかねにし草葉かて野への露はいふと

家に恋十首歌よみ侍ける時

権中納言俊忠

秋のまよふを消へき物と露霜乃いふに名のへとなめく(らん)

思しらす

道信朝臣

あさなりとし(おもふ)ととも君よりは物思ふ袖乃つゆは露

藤原元真

恋しくは我身を露と消なむ消なはつらき言葉を

たのめて待ける女の許にをそくまかりて

待わひたりける男にかはりて

和泉式部

今こんといふ言葉を頼みにてかく露ならぬ身をそくらん

たのめつる程すくなき待ける女によ(のり)ひき

しくおもひて聞く待てをこするに

藤原長能

おきとめる露の消やすきと物思ひやへのうきなん

藤原惟成によみつかはしける

読人しらす

しらへてや尋らん交野の小萩か下葉色に出けり

返し　藤原雅成

萩のはや露のけしきもうちつけにもとよりかはる心あらはさ

題しらす　花山院御哥

よしさらは消かへりつゝ秋萩の露のよすかとおもほえて

ひとりしくまつしらぬ人あり

光孝天皇御哥

君かせぬわか手枕は草なれや涙の露のよなよなそおく

返し　よみ人不知

露ならん袖はたのまれなと涙の川のみなそこをそなれ

みちのくに侍ける女に九月計

つかはしける　源重之

思ひやれよその村雲時雨つゝあたちの原にもみち葉ちるらん

思ふこと侍けるに秋の夕暮ひとりなかめて

よみ侍ける　六条右大臣室

身にちかく来にける秋をしらぬかなよそにおもひし心とも

題しらす　伊勢

色かはる萩の下葉をみても先(まつ)人の心の秋そしらるゝ

いふつまてうきをかさねしなかにきりにあはれみそふ

謙徳公

人こそ見ぬ秋の浪ちりみちてけふも河原につなかれし舟

浪のよる見えし出つるあまの釣させるのかき乱したる思ひそ

光孝天皇御歌

坂上是則

枕のしたも思ひし涙川と我身のこゝろもなかれきり

読人不知

なれしに袖よみかはとみさらぬよりおもひに舟よせしつりに

いりつ袖別しよりも白雪の衣をしきこゝにいつそあか

あふよのなきの下草みえわたてこゝろなきなれはそなたへ過

滝よ高くりゆの絶えぬひのあやにも見えてゆく風吹とも

忘れんと思ふ心のこゝろにもまどひよりまた物をえてはあさき

うれなくも人かくいふともこそしればかゝる恨のなにとそ恋しき

命とやおもへなからぬ物ゆへにさしこさむあかなくもかな

いつまでかわすれぬ人を世中に身のかたはらにわすれ

今までにわすれぬ人ハ世にもあらし我のけはしくも遠

玉のをよ絶えなはたえねなかるハ花のなかくもたのま

志らぬ井でのたま水よくそてたのしく見るもあるき世

君かあたりみつゝをゝらん伊駒山雲なかくしそ雨ハふるとも

中空にたちゐる雲のあともなく身のはかなくもなりぬへきかな

雲の上のかる山ありよそにも見てしとそ思ひける人ハ

もろはそてよそハわかくて山吹の花をみる時そねたかりける
わかれにしかのちそ人に恋しき今よりよそに知人もなき
人丸
夜ゐゆかしの跡のつれもなしこそとふりくれしかと
夏草の露わけ衣きもせぬになとわか袖のかはく時なき
八代女王
山藍とるなかしの川の河風にいのりそ渡る下に綾と
こゝよりしかれぬるやふ
恨つゝぬる夜の袖のかはかぬハ枕の下に志ほやみつらん
中納言家持よつかしけり

山口女王
あしへよりみちくる志ほのいやましにおもふか君かわすれかねつる
志かのうらのまへよりかへる浦濱のうらさひてしひ知ゐ世へり
我しらず
赤染衛門
いかにして花しぬらんとこそはの夢より枝は摘むともしらへ
和泉式部
うちとけて寝ぬ物ゆへに夢をとて物思ひまさる比のわさかな
伊勢
恋しみの夢にありつゝみて涙はしひ縫に人そて恋さ
盛明親王

春のよの萩の下葉はけしくかたみすゑにおくへき秋まさん

女御徽子女王

おく萩はつゆさとしつゝはくとひかくさむ袖そぬらさ

花の秋女郎花にまりて錦まつり

けり　　能宣朝臣

く汁斜くあしけり萩の秋よりいつみしつ萩にうつ絶ゑ

題しらす　　寂蓮法師

涙川身もうくはかりなかるれとけぬは人の思ひなりけり

百首歌奉りし時　　家隆朝臣

あふとみてことそともなくあけぬなりはかなの夢の忘れかたみや

題しらす　　基俊

ゆふされはおかのへの萩にさそふ人のみてもそゝすま

千五百番歌合に　　俊成

衰かりてねよのよみ萩はなかひとよむすひそわれて

たへいとくれ　　定家朝臣

かきやりしそのくろかみのすちことにうちふすほとは面影そたつ

和歌所歌合に遇不逢恋と　　俊成卿女

夢かとよ見し面影も契りしも忘れすなからうつゝならねは

題しらす　　式子内親王

ちらさてそきえぬ命となけきこしまつにねられぬみをもなき世よ

弁

忍ふけふ世の契をたのみてしいくよふるともそのかひもなき

崇徳院に百首歌奉りける恋歌に

俊成

思ひ侘ひ面影はなほかこちて恋せさりせんおそ恋しき

恋しらす　清輔

なかれそふきみにはしらすむすふかりめぬ袖の関守

男のひさしくかよはさりけるにつかはしける

やとや待つれなしとある

馬内侍

忘らるゝ恋さしもなそつらくはいかなる三河なるさ

むかし見し人賀茂の祭にあひていしふ

いそしらてなんまかりけるかとひく

侍けるまた

君しまれゆきてとさきむかへは人とこそ思へ

どうし比あへん侍りけり女のもとより摘

つかはすとて　藤原仲文朝臣

花咲ぬ枝末のそ海の松への心にしれは思ひ出なん

久しくなせぬ人なり

大納言経信母

なきつゝる法のちからはあまたとしまに彼よ人のもとすむなり

忠盛朝臣身まかりて後いつと思ひん

之しく菩つまねとともめしやなとひ

待人はきこゆるに　前中納言教盛母

おもはねは人の心もつらからてやしきふにも袖はぬれけれ

身はしらす　皇嘉門院尾張

なかなかにしなとも人のはかなしも世なかれむくひなり

和泉式部

いふていふに世よありへても思ひも物思はゝさき

ゐつやふ

うまれくはこゝろとともありそまつくきそなるかくさ

素性法師

逢ことのなきにとなるもみたれぬ人の身やとともくさ思へん

小野小町

秋風そあわぬるのきたらは思ひ思ふ人よ思ひあき

よしのふ郎

くもりなくめちに浦こて岩橋の絶し中とやそ見

祭主輔親

今やとて忍ひかそて越中なる水のかれはゆて思へん

いせ

思ひやるこえの山乃一松契りしよいかにと色まさるとて

業平朝臣

出てゆかは心にいはまくらぬふたつ通路とらは御なん

袖もかさとのみ袖よとゝめ垂て我とふ人はなきとつま女

斎宮女御よつかはしける

天暦御製

天の原そこともしらぬ大空におほつかなさを歎つるかな

御返し

女御徽子女王

歎くらん心を空にみてしかなたつ朝霞に身をやなさまし

題しらす

光孝天皇御製

あはすしてふる比のあまたあれははるけき空になかめをそする

女のかりへまうかとさて

兵部卿致平親王

思ひやる心も空に白雲の出たつかたをしらせやはせぬ

斎いましきて

三乃孫

雲ゐより声山鳥の鳴てけり思ひのみこそ恋しかりけれ

弁更衣ひさしくまいりてはへりけるに

ませけり

延喜御製

雲ゐなる雁に鳴てくる秋よあとくるは人のなきてつまをせぬ

斎宮女御春の比まゐりてひさしくさふら
はさりけれは　　　　天暦御哥
春ゆきて秋まてとやはおもひけんかりにはあらす契しものを
題しらす　　　　西宮前太政大臣
初雁のはつかに聞しことつても雲ちに絶てわふる比哉
五節の比内にて見侍ける人に又のあした
つかはしける　　　　藤原惟成
なく夜計そ重にぬる冬の日数のまてこほる
題しらす　　　　藤原元真
住吉の恋忘草たねたえてなき世にあへる我そかなしき

斎宮女御まいり侍けるにいつしかなと
ありきん　　　　天暦御哥
あふ事はかたき数とも思ひしにかゝる恋にも庭よとまれ
ひさしくなりける人の許に
　　　　謙徳公
なかれ世のつきぬなけきに身しはゝ何よ命をとけて忘ん
題しらす　　　　権中納言敦忠
心にもまかせさりける命もてたのめもおかしつねならぬよを
　　　　藤原元真
世の中も人のつらさも思はれて恋しきにこそ思絶ぬれ

思くらつひ給きし女のおやさしてさ
め給けるハ　象綫堂
数なくらほどや世中にいとなき我のさ巻
然しらす　荻原惟成
命ハたゞ心とひくほどやはらハ袖のなき老
読人不知
わするひれとるハ山きハ白菊の秋の名ほど思ひしを
今よりハおいとはれや白妙の我衣手の時なき
玉つけ〓きまく袖こされて秋よ衣にふれて独を
おふとをおなりなりて思ひとむ草ハ秋露の〓〓つまて
秋の日のむきの風のさらに我ハ袖とひれの〓なれ
箸露乃聲の鏡にてほ〓思ひすゝそなるらん
木すの松ハつゆもおなにうみゝの〓も堀〓
白露ハ立さらしともこりも濱にら〓のあかれとも
ゆくて月さハかなと〓波あつとらとてとろ
おまみの〓子

新古今和歌集巻第十六

雜哥上

入道前関白太政大臣家百首哥よませ侍りけるに立春の心を　皇太后宮大夫俊成

年くれし涙のつらゝとけにけり苔の袖にも春や立らん

土御門内大臣家に山家残雪と云心をよみ侍けり　有家朝臣

山陰やさらては庭に跡もなし春そきにける雪の村消

圓融院位さり給ひて後舟岡山に子日し給けるに参てあしたにたてまつる

一條左大臣

哀なり昔の人を思ふにはきのふの野へにみゆきせましや

御返し　圓融院御哥

引かへて野への気色は見えしかと昔を恋る松はなかりき

月のあかく侍ける夜袖のぬれて侍けれは　大僧正行尊

春来れは袖の氷もとけにけりもりくる月のやとるはかりに

鶯を　菅贈太政大臣

谷ふかみ春の光のおそけれは雪につゝめる鶯の声

梅花を

鶯にはまつはせける梅花鶯のこゑやまちつくらん

枇杷左大臣の大臣になりて侍けるよろこひやるとて梅を折て　貞信公

をそくとくつゐに咲ぬる梅花たかうへをきしたねにかあるらん

延長の比ほひ五位の蔵人にて侍けるをはなれ侍て朱雀院承平八年又かへりなりてあくる年の正月に御あそひ侍ける日梅の花をたをりてよみ侍ける　源公忠朝臣

百敷にかはらぬものは梅花おりてかさせる匂ひなりけり

梅花を見給て　花山院御製

色かをはおもひもいれす梅花つねならぬ世によそへてそみる

上東門院世をそむき給ひにける春庭の紅梅をみ侍て　大弐三位

梅の花なに匂ふらん見る人の色をも香をもわすれぬる世に

東三條女御にはへりける時円融院つねにまうのほり給ふときゝ給てゆけいの命婦の許につかはしける　東三条入道前摂政太政大臣

春霞たなひき渡る折にこそかゝる山へはかひもありけれ

返し　圓融院御製

紫の雲にもあらて春霞たなひく山のかひはなにそも

柳を　　　　菅贈太政大臣

みちのへの朽木の柳春くれハ哀昔としのハれそする

きよはらのふかやふ

昔みし春ハむかしの春なから我身ひとつのあらすもある哉

堀川院におはしましける時閑院の左大将の家の桜をりにつかはすとて

圓融院御製

かきこしにみるあた人の家桜花ちる斗ゆきてをらはや

返し　　左大将朝光

をりにとハ思ひ(ふとそり)やすらん花桜ありしみゆきの春を恋つゝ

高陽院にて花のちるをみてよみ侍ける

肥後

万代をふるにかひある宿なれやみ雪とみえて花そ散ける

返し　　二条関白内大臣

枝ことの末まて匂ふ花なれハちるもみ雪とみゆるなるらん

近衛司にて年久しくなりて後うへのをのことも大内の花みにまかりけるによめる

藤原定家朝臣

春をへてみゆきになるゝ花の陰ふりゆく身をも哀とや思ふ

最勝寺の桜は鞠のかゝりにて久しくなりにしを

かその末にふりて風にちるさくらかなしさて
待しかはその ことともにおなせくしと末とその
詞よらんしらへ乃をり時出んまゝりて見ん待
けるはおほさえれとらしく書にし春まて
立ちかれまけるすなかと思ひそくしあつ

藤原雅経

なほ見てみれは花の雲そともさし白川の花の下かけ

建久六年東大寺供養に行幸時興福寺
の庭へ桜はうちなりけるをそ枝にむすひて
結けり

読人しらず

尋てと思ひなそそ花桜ちらぬみゆきにあふ世をそしり

藤かとて給けるに後徳大寺左大臣白川の
花見にはなそひ給ふれはまゐりてよみ給ふ

源師光

いさや又月日のゆくもしらぬ身は花の春とも今日こそ知れ

数ならぬみにも人ともにおほつかなく白川
の家によひりて又の日家のつとにまうし侍へる
まて中侍りける

和泉式部

拾人の名もしらぬあちこちなる身も我宿の花のみそする

左はしらず

藤原高光

みくとえしまこしも月まちかねし花乃盛ハるかなりける

京極前太政大臣家ニ白川院御幸し給ひて又の日花の歌奉られけるによみ侍ける

堀川右大臣

老よまろ志もむかしにかはらねとけふのみゆきハ雪とみえけり

後冷泉院御時御前にて翫新成桜花といへる心を人々つかうまつりけるに

大納言忠家

桜花おりてみしにもかはらぬに散らぬ斗そしるしなりける

大納言経信

ゆきとわくハ吉野山の雲みえて散とも志らぬ色

云風散花といふことをよめる

大納言忠教

桜花過ゆく春の友とてや風の音せぬ世にもちるらん

鳥羽殿にて花の散かたなるを御覧して後三条内大臣に給はせける

鳥羽院御製

をしめとて常ならぬ世の花なれハ今ハこの身を西にもとめん

世をのかれて後百首哥よみ侍けるに花哥とて

皇太后宮大夫俊成

今ハまれ吉の乃山の花をこそ宿の物とも見るへかりけれ

入道前関白太政大臣家に歌合に

恋の道ハ猶こそ世をも思はれいつかは晴れと見るへき

おもしろき歌也 百首中

さる月も雲井なからに行めくりもそこの世の光なりけれ

恋の比大乗院より人につかはしける

前大僧正慈円

見せはやな志賀の唐崎ふもとなる長等の山の春のけしきハ

返し

山本の心に白らんをハ清き道なるあてくかへらさらハのそや

西行法師

世中をそむくへいふへて哉もの我身をさてそいつちかもせん

東山に花見に行とてこれを道に思ひけるをさしおふる事ありて帰りてや

つかはしける

安法法師

身ハとめつ心をおくる山桜風のたよりに思ひおこせよ

返し

俊頼朝臣

桜あかれけるかな波立つへり身をとをかはしかなの花

橘為仲朝臣みちのくにゝ侍ける時あまた

つかはしける中に

加賀左衛門

白波のこゆらん末の松山ハ花とやミゆる春のよの月

おほろかに霞こめたる海の松かえのひまより春の夜の月

題しらす　　慈鎮

都そて春をたにやハ思しえぬいつちか鶴の鳴そめけん

法印孝清

世をいとふ苔の松かけにたちよらん鶴やしたまん

百首歌奉し時　前大納言忠良

松よりまへハこれをさすらふ小家之山田の蛙乃夕暮れの声

千五百番歌合に　有家朝臣

春霞のあまりここ世を秋むかふ霧よ枯野草かけすゝ

崇徳院にて林下春雨といふことを

八条前太政大臣

とゝさか木の下陰にいれても松は春雨によるへ無

後鳥羽院位去らせ給て後実房朝臣馬命

婦に梅を折て御使して数多の花を屏風

のうへよりあけこし給ふ

実房朝臣

御返し

後鳥羽院御哥

九重にありてや咲し山桜のいかなる色と人にしらせん

五十首哥奉りし時　前大僧正慈円

なきのこるに思ひ来兼ぞ三かさねてかくるる咲田子丸しあのや

世をのかれて後四月一日上東門院太皇太后

宮と申ける時衣かへの御装束奉るとて

侍とて　法成寺入道前摂政太政大臣

から衣花の袂にぬきかへよ我こそ春の色はたちつれ

返し　上東門院

から衣たちかはりぬる春のよにいかでか花の色もみるへき

四月祭日まて花のちりのこりて侍ける年其

花をつかひの少将のかさしに給ふ葉に

かきつけ侍ける　紫式部

神代にはありもやしけん山桜けふのかさしにおれるためしは

いつきのむかしを思ひ出て　式子内親王

時鳥そのかみ山の旅枕ほのかたらひし空そわすれぬ

左衛門督家通中将に侍ける時祭使にて

かんたちに侍りて侍ける暁斎院の女房

（車）の中よりつかはしける　読人しらす

立出る名残有明の月影にいとゝかたらふほとゝきすかな

返し　左衛門督家通

いと無とくるてぬ思ひの代はれくおもはまつよゐの曉

三条院御時五月五日菖蒲の根を時鳥の
かたにつくりて梅の枝にさして人のまへにありて
侍けるを見て哥よみてまいらせよとおほせ
られけれは　　三条院女蔵人左近

梅かえにおりたかへたる時鳥聲のあやめも誰かひくへき

五月計物へまかりけるみちにいとしろく
くちなしの花咲けりけるをかれはなにそ
と問けれとも人のこたへさりけれは

小弁

うちつけにまちかくこそ(?)ふとこそへはこたへぬなりけれしられもせ(?)

五月雨の空晴て月あかく侍けるに

赤染衛門

五月雨の空たにすめる月影に涙の雨ははるゝまもなし

述懐百首哥中に五月雨を

俊成

五月雨はまやの軒端のあまそゝきあまりなるまてぬるゝ袖かな

花山院御哥

独ぬる宿の床夏朝な朝な涙の露にぬれぬ日そなき

贈皇后宮にそひて春宮にさふらひける

同少将義孝むさしくまのゝはつきさうに
なてしこの花につきてはへりける

恵子女王

よそへてみれとも露になくさまぬいかにかすへきさとのなてしこ
月あかく侍けるに来人の袂をはらへてもし
ゆふくれは西に隠けるにやつらしきる

和泉式部

とひおはしまさひ空は同てまたみしや月の光ならん
覧しらす

七条院大納言

思ひやれ露は袂にあまるらん秋のゆふへを誰にとはまし

こさはいの空より雨にをもひゐてまつり
侍けるに

中務

秋の夜は吹そふ秋風に雲の上まて涼しからん
業平朝臣の装束つかはして侍けるに

紀有常朝臣

秋やくる露やまかふとおもふまてあるは涙のふるにそありける
きやうらわかれにしもらに結ふ人哉
ゆくはつくゆきさあひさゝかのかきに七月十
日のよる月よさかれくく梅結たれけて

紫式部

めくりあひてみしやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月影
見しこれ家にかへりける時中納言統理年来宮
つかうまつりけるを世をそむきぬへき
様に思ひたちける気色を御らんして
　　三条院御哥
月影の山のはを分てかくれなはそむくうき世を我やなかめん
返し　藤原為時卿
山のはを出てそらにかゝる月影を称ぬるのちく深きにきるか
参議正光おなしく月影によせて人の許に
ゆかりなるを見あらはしつかはしける

　　伊勢大輔
浮雲はたちかくせともひまもりて空行月のみえもするかな
返し　参議正光
うき雲にかくれてとこそ思ひしかねたくも月のひまもりにける
三井寺にまかりて日来ゐてかへらんと
しけるに人々なこりをしみ侍れは
　　刑部卿範兼
月をみてあそひしわれのみそ思ひしに山のはに出て
山里にこもりゐてわかれける人の同しく侍りけれは
　　法師静賢
まつとし

思出る人もあらしの山のはにひとりそ入し有明の月

八月十五夜和哥所にてをのこともに哥よませ給ひしに　民部卿範光

和哥の浦に家の風こそなけれとも波吹色は月にみえけり

和哥所哥合に湖上月明といふことを

宜秋門院丹後

よもすから浦こく舟は跡もなし月そのこほり志かのうら浪

題しらす　藤原盛方朝臣

山のはにおもひもいらし世中はとてもかくても有明の月

永治元年譲位ちかくなりぬるよもすから

月をみて読給ける　御製

忘れしよ忘るなとたにいひてまし雲ゐの月の心ありせは

崇徳院に百首哥奉りけるに

いかにして袖に光のやとるらん雲ゐの月はへたてこしみを

文治の比ほひ百首哥よみ侍りけるに懐旧哥とてよめる　左近中将公衡

心には忘るゝ時もなかりけりみよの昔の雲の上の月

百首哥奉りし時

二条院さぬき

昔みし雲ゐをめくる秋の月いまいくとせか袖にやとさん

月前述懐といふことをよめる

藤原経通朝臣

うき身世になからへは猶思ひ出よ袂にちきる有明の月

石山に侍りて侍く月をみてよみ侍りける

藤原長能

都にも人やまつらん石山のみねにのこれる秋の夜の月

題しらす　三統孫

あかちそかへと遠きにみし月のちかれと秋へふかくを

月乃かけつまけつ夜あかすひとりひとつへの

山の月はかるかやといそりきれはある

源道済

徒にねてはあかせともろともに見つこそよ月はみさりき

秋ふく仰まて称されたる徒けまし月のいろ

をなかめて

増基法師

天原遠に独あかむましは袂に月のいそふけるかれ

能宣朝臣大和守まかりける山ちかく侍る

女の許に秋深く成りてあはさりけるを

うらみ侍けれは　読人しらす

たのめこし人をまつちの山風によふけし月は入にき

百首歌奉し時　摂政太政大臣

月みむとおもひし人はこそかれ庭の松かせ

五十首哥奉りし中に山家月の心を

前大僧正慈円

山里に月はみるやと人はこねと空ゆくかせそ木葉をもふく

摂政太政大臣家に侍し時月哥五十首よませ侍けるに

暁の月の行末となかめてそ野寺の鐘はきくへかりける

おなし家の哥合に山月の心を読る

藤原業清

山のはを出ても松の木間よりこゝろつくしのあり明の月

和哥所哥合に深山暁月と云ことを

鴨長明

よもすから独み山の槙の葉にくもるもすめる有明の月

熊野にまうてゝ侍し時奉りし哥中に

藤原秀能

松山の木葉の松の杖風にたえしくるゝの雲そ払ふ

月もあはれよもの浮雲空に消てみ山の行夜の嵐か

山家心をよみ侍ける

猷円法師

深山路は柴のあとたえ人の跡にも山のはちかくすめる月影

題しらす　花山院御哥

曉の月みんとしもおもはねと見し人ゆへになかめられつゝ

伊勢大輔

有明の月計こそかよひけれくる人なしの宿の庭にも

和泉式部

住馴し人影もせぬ我宿に有明の月のいくよともなく

家にて月照水といへる心をよみ侍りける

大納言經信

すむ人もあるかなきかの宿ならし芦間の月のもるにまかせて

秋の暮に小病にわつらひて世をのかれにける

又の年九月十日月くまなく侍けるに

よめる

俊成

思ひきや別し秋にめくりあひて又も此世の月をみんとは

題しらす

西行法師

月をみて心うかれしいにしへの秋にもさらにめくりあひぬる

よもすから月こそ袖にやとりけれ昔の秋を思ひいつれは

月のいろに心をきよくそめましや都を出ぬ我身なりせは

思ひやる浮世をいとふ心こそ身にしられぬる秋の月

ふけにける我身のかけを思ふまにはるかに月のかたふきにける

入道親王覺性

なかめてもおもひしことのかはりなは思出にせん月はあはれと
藤原道経
秋の夜の月よ心をなくさめてうき世よそのつかりあるかな
五十首哥よみ侍しに
前大僧正慈円
憐とて月をなかむる身となりにけりいそちもあまりすきて歎き
百首哥奉し時　藤原隆信朝臣
かくてもと六十の秋は見にけり今はいく山のはの月
題しらす
源光行
ふるさとの秋の月をみは行末とうき身の思出にせん

千五百番哥合に　二条院讃岐
身のうさを月やあらぬとなかむれは昔なからの影そもりくる
世をそむきなんとおもひたちける比月を見て
よめる
寂超法師
在明の月よりほかに誰をかは山ちの友と契をくへき
山里にて月夜都の人をまつといふ心をよみ
侍ける
大江嘉言
都人ねてまつらめや宿にむなしくや月よをあかしつらん
長月の在明の比山里より式子内親王に
をくりける
惟明親王

さひしさを行くを見ぬてみけれは数おかゆつさらしなの月

返し　式子内親王

さらしなやおなしなくさめかねし都のほかも姨捨の山さと

建日詩合に暁月を　摂政太政大臣

天の戸をおしあけかたの雲間より神代の月の影そ残れる

右大将忠経

雲をのみつらき物とてあかす夜の月よ梢にをちかたの山

藤原保季朝臣

入やらて夜をおしむ月のやすらひにほのかにあくる山のはそうき

月あかき夜定家朝臣にあひて侍けるに
哥の道に心さしふかき事はいつはかりの
事にかとたつね侍けれは若く侍し時西行に久しく
あひともなひてきゝならひ侍しよし申て其
かみ申し事なとかたり侍てかへりて朝に
つかはしける　法橋行遍

あやしくそかへさは月のくもりにし昔かたりに夜やふけにけん

旅にて月を　寂超法師

旅ねの宿の月にもとはれん我をはわするや昔なれみさと

遍照寺にて月を見て

平忠盛

さそはれん昔の人は影さして宿りし袖は在明の月

あひ志りて侍ける人の許にまうできたりけるに其人はかなくなりにけりと聞えて

宿なりし月乃佗しく見えければ

前中納言匡房

風へ蘆志けれる宿は人め通ひまれなる月の影ぞすみける

題しらず

神祇伯顕仲

かりあかす旅ねの浦のあさなきに秋をのこさぬ月のさやけさ

俊恵法師

難波かたしほひにあさるあしたづも月かたぶけば声乃きこゆ

和歌所歌合に海辺月といふことを

前大僧正慈円

わか浦に月の出しほのさすまゝによる鳴鶴の声そかなしき

定家朝臣

もしほくむ袖の月影おのつからよそにあかさぬ須磨の浦人

秀能

明石かた夜わたる人の袖とみよまなきに月はやとる物かは

熊野に詣して侍し次に切目宿にて海辺眺望といふ心をのこともつかうまつり

しに　源具親

なにはかたしほちやとほく月かけにかすめるあまの釣舟

八十にあまりて後百首の哥めされし
時によみて奉りしに　皇太后宮大夫俊成

しめをきて今はとおもふ秋山のよもきかもとに松虫の鳴

千五百番哥合に

あれわたる秋の庭こそあはれなれまして消なん露の夕暮

題しらず　西行法師

雲かゝる遠山はたの秋されはおもひやるたにかなしきものを

五十首哥人々によませ侍りしに述懐の心を
よみ侍りける　守覚法親王

風さはく〔そよく〕志のゝをはらの世をおもふね覚に露そこほるゝ

寄風懐旧といふことを　左衛門督通光

あさちふや袖にくちにし秋の霜わすれぬ夢を問〔吹く〕あらしかな

俊成女

ゐまの江に眠ねの夢の世をとへてこゝのへ荒杜風

題しらず　祝部成仲

白露はおきにけらしな宮城野のもとあらの小萩末たわむまて

法成寺入道前太政大臣女郎花をおりてさしよ
せさせ給へれは　紫式部
女郎花さかりの色をみるからに露のわきける身こそしらるれ
返し
法成寺入道前摂政太政大臣
白露はわきてもおかし女郎花心からにや色のそむらん
題しらす　曽祢好忠
山里にくすはひかかる松垣のひまなく秋はものそかなしき
秋の夜月に老ぬる事をなけきてよみ
侍ける　安法法師
百とせの秋の半はすこしきぬいつまて草の露と消なん
彩縄錦尼按別当のもとにつかはしける
時つかはしける　前中納言匡房
妹まちにみの山風さひしきに友なき月を誰とみるらん
九月計小萩を崇徳院に奉るとてよめる
大蔵卿行宗
花薄秋の末葉になりぬれはことそともなく露そこほるる
山里に住侍ける比嵐はけしき朝前中納言顕長
許に遣しける　後徳大寺左大臣
夜半に吹嵐につけて思ふかな都もかくや秋はさひしき
返し
前中納言顕長

世中に秋そてなきハ我ものとしらぬ嵐の音をそきく

清涼殿の庭にうつりける菊を後さらにほりて
のち出されし時　冷泉院御歌

うつろふハ下葉はかりの秋なれハ今はよそふる花の宿

長月の比聖の家に前栽うへけるに

源順

たのもしな聖の家へうつる菊さて月におもはむことをそ

題しらす

読人不知

山川の岩ねのもとに照してひきりてそみる松の嵐

百首歌奉りし時　土御門内大臣

[illegible]とにけのおふを分て君まつる庭そうしこし(?)

最勝四天王院の障子にあふくま川書たる
所

家隆朝臣

君か代にあふくま川の埋木も氷の下に春を待けり

元輔か昔住ける家のかたはらに清少納言
すみける比雪のいみしく降てへたての垣
もたふれて侍けれハ申つかはしける

赤染衛門

跡もなく雪ふる里ハあれたるをいつれ昔の垣ねとかみん

はかなくなりし事世をまよひて雪降けり(?)

後白河院御哥

露の命消なましかはかく斗ふる白雪をなかめましやは

雪によせて述懐の心をよめる

俊成

杣山や梢におもる雪おれにたへぬなけきの身をくたくらん

佛名終によそへりもとけらんとして

朱雀院御哥

時ありて霜に消ぬは花なれと老ふは昔にかへるそあれ

花山院おりゐ給ひけるを聞て又のとし紅葉

なにをもとつりもにたちそへやりけり

前大納言公任

往日ゝく涼あわち菊ちゝ哉れとそのゝゝあくゝら花哉

返し

御形宣旨

君か夢といつまて世をそとふまにおもひとこえぬ花のかをりさ

皇太后宮大夫俊成

花ぬとも又しあらんと頼みは後の玉をとまゐつ哉

慈覚大師

大かたは月日をとめし我身かは年のくれぬる

ならましかは

新古今和歌集巻第十七

雑歌中

朱雀五年九月紀伊國行幸時

河嶋皇子

白浪の濱松か枝の手向草いく世まてにか年の經ぬらん

題しらす

式部卿宇合

山城の岩田の小野の柞原見つゝや君か山ちこゆらん

在原業平朝臣

あしのやのなたのしほやきいとまなみつけのをくしもさゝてきにけり

はるゝ夜の星か川への蛍かもわかすむかたのあまのたく火か

読人しらす

しかのあまのしほやく煙風をいたみ立はのほらて山にたなひく

貫之

難波めの衣ほすとてかりてたくあし火のけふりたゝぬ日そなき

なからの橋をよみ侍ける

[illegible]

年ふれはくちこそまされ橋柱昔なからの名たにかはらて

恵慶法師

春の日のなからの濱に舟とめていつれか橋ととへとこたへぬ

後徳大寺左大臣

朽にける長柄の橋をきてみれは芦のかれはに秋風そふく

権中納言定頼

おとろかせよふかく吹し難波かた嘯かせて波そよすなる

すま乃浦のわたりにまかりてよめる

藤原孝善

すま乃浦のなきさにたちてみわたせは霧にまよふあまの釣舟

天暦御時屏風歌　壬生忠見

秋風の関吹こゆるたひことにこゑうちそふるすまの浦波

五十首歌よみて奉りし時

前大僧正慈円

すまの関夢をとをさぬ波の音を思ひもよらて宿をかりけり

和歌所歌合に関路秋風といふことを

摂政太政大臣

人すまぬ不破の関屋の板ひさしあれにし後はたゝ秋の風

明石風といふことをよめる　俊頼朝臣

あま小舟とま吹かへす浦風にひとりあかしの月をこそみれ

眺望の心をよめる　寂蓮法師

和歌の浦を松乃葉こしになかむれは梢によするあまの釣舟

千五百番歌合に　正三位季能（経イ）

このえ見吾乃宮は神さひてよろひあけゝる浦の松風

海邊乃心を　藤原秀能

しら波に結ひしとそもいつせんなる乃出や八重の霞そ
世の海のまふくして下侍そ大よるの浦り

述懐し侍とて　貫之

いく代へし磯への松そ昔より立よる波の數は知らん

返し　女御嚴子女王

大淀乃浦に立波かへらすは松のかはらぬ色をみましや

大貳三位里に出侍けるをきこしめして　後冷泉院御製

まつ人は心ゆくとも住吉の里にのみとは思はさらなん

御返し　大貳三位

住吉の松はまつとも思ほえて君か千とせの影そ恋しき

數歳て不知よ海を侍けるに　祝部成仲

ちよすむ波乃聲かてしつかなる吹上乃濱の秋の初風

百首哥奉りし時海邊哥　越前

おきつ風夜寒になれや田子の浦のあまのもしほ火焼まさるらん

海邊霞といふ心をよみ侍ける　家隆朝臣

みわたせは霞のうちも霞けり烟たなひくしほかまのうら

崇徳院によませ給ける百首哥の中に若菜を
よめる　皇太后宮大夫俊成

けふとてや礒菜つむらんいせしまやいちしのうらのあまのをとめ子

伊勢にまかりける時よめる　西行法師

すゝか山うき世をよそにふりすてゝいかになりゆく我身なるらん

題しらす　前大僧正慈円

世中を心たかくもいとふかなふしのけふりを身のおもひにて

あつまへ修行し侍りけるにふしの山をよめる

西行法師

風になひくふしの烟の空に消て行ゑもしらぬ我おもひかな

五月の晦日にふしの山の雪しろくふれるを
みてよみ侍りける　業平朝臣

時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこまたらに雪のふるらん

題しらす　在原元方

春秋もしらぬときはの山里はすむ人さへやおもかはりせぬ

五十首哥よみし時　前大僧正慈円

世をすてゝ身をは峯の風をきゝてそふるこの杉くもみゆれ山

題しらす　西行法師

吉野山やかて出しと思ふ身を花ちりなはと人や待らん

藤原家衡朝臣

いとふても猶いとはしき世なりけり吉野のおく秋の夕暮

千五百番歌合に　右衛門督通具

一すちになれなはさても杉の庵によな〳〵かはる風の音かな

守覚法親王五十首歌よませ侍けるに

閑居の心を　有家朝臣

誰かはと思ひたえても松にのみおとつれて行風はうらめし

鳥羽にて歌合し侍しに山家嵐といふ

ことを　宜秋門院丹後

山里は世のうきよりも住侘ぬことのほかなるみねの嵐に

百首歌奉しに　家隆朝臣

瀧の音松の嵐もなれぬれはうちぬる程の夢はみせけり

題しらす　寂然（蓮）法師

ことしけき世をのかれにしみ山へに嵐の風も心してふけ

少将高光横川にのほりてかしらおろし

侍けるに法服つかはすとて

権大納言師氏

おく山のこけの衣にくらへみよいつれか露の置まさるとも

返し　如覚

白露のあたにおく山のこけの衣は風もさはらす

能宣朝臣大原野にまうてゝ侍りけるに山
里のいとあやしきに住へるをみて
人の侍けれはいつくよりまうてきたるそと問
侍けれは　　　読人しらす

世中をそむきにとてはこしかとも猶うきことは大原のさと

返し　　　能宣朝臣

身をなけてかの山とおもひつゝいかに堅（さかし）りて人のいりけん

ある所山に住侍ける許にまかりて
まかりけるに庵の戸をとちて人も侍
らさりけれは柱に書付ける

恵慶法師

苔の庵さしてきつれと君まさてかへるみ山の道の露けき（けさ）

返し

あるしなくて風もはらはぬ苔の庵に我はなくとも露はかゝらん
もしらす　　　西行

山ふかくさこそ心はかよふとも住まて哀をしらんものかは
やまに住まぬ人はいかならんやおもひまて入月をみる世に

山家送年といふ心をよみ侍ける

寂蓮法師

立いそくつま木おとしゝ跡のふる山ちに如まけるか

住吉社哥合に山を　太上天皇

おく山のおとろかしたもふみ分て道ある世そと人にしらせん

百首哥奉りし時　二条院さぬき

なからへて猶君か代を松山のまつとせしまにとしそへにけり

山家松といふ心を　皇太后宮大夫俊成

今はとてつま木こるへき宿の松千世をは君となをいのるかな

春日社哥合に松風といふことを　有家朝臣

我なから思ふかものをとはかりに袖にしくるゝ庭の松風

山家によみ侍ける　道命法師

世をそむく所とかきくおく山はもの思ひにそ入へかりける

少将井尼大原よりいてたりときゝて遣ける　和泉式部

世をそむく方はいつくもありぬへし大原山はすみよかりきや

返し　少将井尼

思ふ事大原山のすみかまはいとゝなけきの数をこそつめ

題しらす　西行法師

誰すみてあはれしるらん山里の雨ふりすさむ夕暮の空

しをりせてなを山ふかく分いらんうきことききかぬ所ありやと

殷富門院大輔

ふしをかみの志き山ふかみて衣とそ見ふ秋ふそゝ門

法輪ちかき住侍りける人のまうてきていそき侍りけれは　道命法師

ふとなきてらん山の嵐とて暮ぬらん人のいそくなるらん

後白川院栖霞寺におはしましけるに駒ひきのひきわけの使にて参りけるに　定家朝臣

嵯峨の山千代のふる道跡とめて又露わくる望月の駒

なきくし侍りける　知足院入道前関白太政大臣

大井川のかはれぬいせきおのれさへなかき世にあひて志つくなりけり

今日は大殿まいりて歌よみ侍りけるに
とし右大臣に数へ養し侍けり　東三条入道前摂政太政大臣

かはせとありきる檜とうち川の浅せ計にあまきけれは

此遊し　円融院御製

昔より絶せぬ川のすゑなれはよとむ計をなにか歎かん

題しらす　人丸

武士のやそうち川のあしろ木にいさよふ波の行末しらすも

布引瀧見にまかりて　中納言行平

わか世をハけふかあすかとまつかひの涙の滝といつれたかけん
京極前太政大臣布引乃滝見にまかり侍
けるに　　二条関白内大臣
みな上の空にみゆるハ白雲の立にまかへる布引乃滝
最勝四天王院の障子に布引の滝書
ける所に　　有家朝臣
久方乃天津乙女か夏衣雲井にさらす布引の滝
天河原を過とて　　摂政太政大臣
昔きくあまの川原を尋きて跡なき水をなかむ計そ
題しらす　　実方朝臣

天川かよふうき木にことゝはん紅葉の橋ハちるやちらすや
堀川院御時百首哥奉りけるに
前中納言匡房
杉の枝も苔むしけりいくふりて世へおりんせきの岩橋
天暦御時屏風によくの前わたりせさ
を描けるに飛鳥川　　中務
定なき名にハ立てもとわたら川やゝ渡りし瀬にそ有けれ
題しらす　　前大僧正慈円
山里に独なかめて思ふ哉世にすむ人の心つよさを
西行法師

山里にうき世いとはん友もかなくやしく過し昔かたらん
やまさとへ人こし道をとはれてもとまるところそらにしらなく
前大僧正慈圓
草乃庵をいとひてもまたいかゝせん露の命のかゝるかきりは
数をそむきし修行し侍けるに同くさ
人のもとへ遣す侍けるに継聖よりつかはし
けり
大僧正行尊
わくらはになとかは人のとはさらん音羽川にすむ身ならぬを
おひ志まりける人の継聖にこもりまて侍け
るにつかはしけり
安法法師
世をそむく山の南の松風にこけの衣や夜さむなるらん
西行法師百首歌すゝめてよませ侍ける
ゆかり
家隆朝臣
早晩れ苔の袂よ露をきて志らぬ山路の月をみるかな
百首歌奉りし小山家乃こゝろを
式子内親王
今はわれ松のはしらの杉の庵にとつへき物を苔ふかき袖
小侍従
志きみつむ山路の露にぬれにけり暁おきの墨染の袖
摂政太政大臣

忘れじの人だにとはぬ山路かな桜は雪にふりかはれども

五十首歌奉りし時　雅経

影やどす露のみしげくなりはてゝ草にやつるゝ故郷の月

俊恵法師身まかりて後、年比つかはしける薪など弟子どものもとにつかはすとて　賀茂重保

煙たえてやく人もなき炭がまのあとのなげきを誰かこるらん

老て後、津の国なる山寺にこもりゐて侍りけるに、寂蓮尋ねまかりて侍りけるに、庵のさま
すみあらしたる気色見て侍るを思ひてのちに
帰りて侍れば　西日法師

やまちわかれは道のむかしを待ちえて絶ゆかしこと来嵐ぞ

山家のあはれくまなくよみ侍りけるに　前大僧正慈円

山里にとひくる人のことぐさはこのすまひこそうらやましけれ

後白河院かくれさせ給ひてのち、百首歌に　式子内親王

をのゝえの朽し昔ハ遠ざかれどありしにもあらぬ世をもふるかな

述懐百首歌よみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

いかにせん賤かそのふのおくの竹かきこもるとも世中そかし

老てのちむかしをおもひ出て

祝部成仲

昨日ハ昔とのミそ思ふ草葉にもるゝ露に袖ぬれて
髪しらす

前大僧正慈圓

思ふ人の里はあれしと尋ぬれハ人ハこゝろへて山下風のたよ

西行法師

古畑のそはのたつ木にゐる鳩の友よふこゑのすこき夕暮

山かつのかたをかけてしむる野のさかひにたてる玉の小柳

志けき野をいく一村に分なしてさらに昔を忍ひかへさん

昔みし庭の小松に年ふりて嵐の音を梢にそきく

三井寺やけてのちすみ侍りける房をおもひ
遣りてよめる

大僧正行慶

すみ馴しわかふるさとハ此比やあさちか原にうつらなくらん

百首哥よみ侍りけるに

摂政太政大臣

故郷ハあさちか末になりはてゝ月にのこれる人の面かけ

西行法師

これやみし昔住けん跡ならんよもきか露に月のかゝれる

人の許にまかりてこれかれ松の花にまかりて

あそびけるに　貫之

法よそで立よりはべりしかば殿の西の松の影
西院の邊よりやあひしりける人を尋ね
侍けるにまかりてとかく女にてぬる中を
まかりてよみ侍ける　俊恵法師

西上ふりはへ人を尋ねまかりたりけるにあれたる宿にすまれつゝ
かゝりなきさ宿と　恵慶法師

いまはへとさひやりてそ立ちより荒れたる宿の苔の岩をし
守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに
閑居の心を　定家朝臣

やまざとに住ける人を昔見てそれより後の跡は絶えき
りの人まうでけるに山人あまたまうでけりを
除とて　清原深養父

なげきこる身は山ながらもうき世にもあらぬ世中に住わびん
題しらず　人丸

妹されいらん人にゆかり立田山あちてとぢても捨てそむ
天智天皇御製

あさくらや木の丸殿にわがをればなのりをしつゝ
ゆくはたが子ぞ

新古今和歌集巻第十八

雑歌下

山

菅贈太政大臣

あしひきのこなたかなたに道はあれど都へいざといふ人ぞなき

日

天の原あかねさし出づる光にはいづれの沼かさえのこるべき

月

月ごとに流ると思ひしますかがみ西の浦にもとまらざりけり

雲

山わかれ飛びゆく雲のかへりくるかげ見る時はなほたのまれぬ

霧

霧たちて照る日の本は見えずとも身はまどはれじよるべありやと

雪

花とちり玉と見えつつあざむけば雪ふる里ぞ夢に見えける

松

老いぬとて松はみどりぞまさりけるわが黒髪の雪のさむさに

野

筑紫にも紫生ふる野辺はあれどなき名かなしぶ人ぞ聞こえぬ

道

刈萱の関守にのみ見えつるは人もゆるさぬ道べなりけり

海

わたつうみの底まてにさよふけは月そすさまん

鶴

庭星の数あいとまつ鶴のよはひを我にゆつらん

波

なる滝の末の河白波とやく志らせいつまてかさまたみ

題しらす　　よみ人不知

さゝ浪や比良の山風海ふけは釣するあまの袖かへるみゆ

白波のよする渚に世をつくすあまの子なれは宿も定めす

千五百番歌合に　　摂政太政大臣

舟のうち波の下にそ老にけるあまのしわさもいとまなの世や

題しらす　　前中納言匡房

さすらふる身は定めたる方もなしうきたる舟の波にまかせて

増賀上人

いかにせん身をうき舟の荷をおもみつゐのとまりやいつくなるらん

人丸

あかもかりさして入江のうきなの世よりもさきにみつきけり

能宣朝臣

あし鴨の風よりさひく萍の定なき世を誰かたのまん

なきさ行の松とふるすとよみ侍けり

頃

老にそふ法の杖にすがりつゝめぐみをぞたのむやはらかに
山みちを猶しるべと待けり

能因法師

足引の山下水に影みればまゆしろたへに我老にけり

尼になりぬときゝける人に装束つかはす
とて

法成寺入道前摂政太政大臣

なれてみし花の袂をうち返し法の衣をたちぞかへつる

后に立給ける時冷泉院のきさいの宮の
御額をたてまつらせ給ひけるを出家の時返し
奉給ふとて

東三條院

当初の玉のかざしをうち返し今は衣のうらをたのまん

返し

冷泉院太皇太后宮

つきもせぬ光のまにもまぎれなでおいてかへるかみの縒

上東門院出家の後金の装束したてたん
のずゞ銀の箱に入て梅の枝につけて奉
らせける

枇杷皇太后宮

かはるらん衣の色を思ひやる涙やうらの玉にまがはん

返し

上東門院

まがふらん衣の玉にみだれつゝなほまださめぬ心ちこそすれ

題しらす　　　　　　　　　和泉式部

志ほのまふよもの浦〳〵尋ぬれと今は我身のいふかひもなし

屏風の絵よ志ほかまのうらかきて侍
けると　　　　　　　　一条院皇后宮

いにしへのあまや煙となりぬらん人めも見えぬ志ほかまの浦

少将高光横川よのほりてかしらおろし
侍けるとききて遣しける

天暦御製

都より雲の八重たつ奥山の横川の水やすみよかるらん

御返し　　　如覚

百敷のうちのみつねは恋しくて雲の八重たつ山は住うし

世をそむきて小野といふ所よ住侍けるころ
業平朝臣雪のいとふかくつもりたるをふみわけて
まうてきて夢かとそ思ふおもひきや
とよみ侍けるに　　　惟喬親王

夢かとも何か思はん浮世をそむかさりけん程そくやしき

都乃かたふむすみ侍はしへしらかもとつまさ
てけるへありけるつかはしける

女御厳子女王

雲ゐよふ宿の蓬ちられすまひなとも杉玉つさハ待すや
あらん

亭子院おりゐ給はんとしける秋よみける

いせ

白露はおきてかはれとももゝしきのうつろふ秋は物そかなしき

殿上はなれて侍りてよみ侍りける

藤原清正

天津風ふけゐの浦にゐるたつのなとか雲ゐにかへらさるへき

二条院菩提樹院におはしまして後の

春むかしを思出て大納言経信参りて侍

りける又の日女房の中につかはしける

読人不知

いにしへのなれし雲ゐをしのふとや霞をわけて君たつねけん

最勝四天王院の障子に大よと書たる所

定家朝臣

大淀の浦にかりほすみるめたに霞にたえてかへるかり金

寂蓮法師千載集書て奉けるつゝみ

紙に墨をすり筆をそめつゝ年ふれと

かきあらはせることの葉そなきと書付て侍ける

返し

後白河院御哥

濱千鳥ふみおく跡のつもりなはかひある浦にあはさらめやは

上東門院高陽院におはしましけるに

幸ゆきてせき入るゝ瀬をはらんして

後朱雀院御製

瀬つきたる人のふみをみるにハ昔より今をうつしさまよきり

權中納言通俊後拾遺をえらひ給けるに

此うたのしをゆるしなきやて給たれハ

中合こそそしてまつ清出せぬなれをはかり

うしして給けるをこそ恐しふつらすと

て

周防内侍

淺からぬ心そこもる菊羽川出入しかれなるまかねを

あかまじとおかせしけれハ忠峯かたと

あつめてまけりしわくふ書付ける

壬生忠見

この世の中をあはく思ひしハ昔の人をおもひしるか

遊女乃心なよみ給けり

藤原為忠朝臣

秋なれと秋をしらぬ雅しをなのまへそこにあをは とあ

より大江挙周始て蔵人上ゆるしまて筆かき

庭よおりて拜しけるを見て給く

赤染衛門

草分て立のる袖のうれしさに絶まぬ波乃露をそかな

秋の野にまつひけるかとこゝろりてきゝしく
とふらしひきる人はつらしけり

伊勢

うつさへ忘やはまろ思草思ふらむ物を秋のゆふくれ

返し　大納言経信

荻風の音せはりせは白露の影れおもふはかならきえやは

おなしよりおもひ侍けるを朝光大将みかうして秋一夜物語して侮くみの日

左大将済時　時ノ

思草いかなる露かむすふらん人と共ねをはかなくなり

返し　左大臣朝光

おきちふとおもひさりせは思草ひとりのみ人露をきましや
まつひける人のうくや待きる

読人しらす

なからへんとも思はぬ露の身なれはさすかにきえんことをこそ思へ

返し　小馬命婦

露の身の消はわれこそ先たゝめおくれんものか森の下草

和泉式部

命にはおもはつゝき身なれとも思ふ人のなさけそこゝさ

例ならぬこと侍けるにたまりけるをもしつの

とよひよ侍りて侍りけるハ

大僧正行尊

定なき昔くらりとうそ道ハ我身を救よへ給へされ

五十年ち年通附　前大僧正慈円

世中ハ晴行空に浮雲のうき我身ひとつそ定めき

御あらぬとく侍るうれ小五動ちうて続侍くる

身の外にわらぬの昔ハ下にいてしもうしちん見を情れ

覚しらす　大僧正行尊

なり返我身ハさうとりもする道ハ君を身さ世に乱ちなり

清原元輔

うしやいてひとく世を見さふらにそむともハ物思ふへぬ身と家

よみ人不知

そむきて天の下に通ぬまし侍いうて小を年のねとなり

延喜御時女蔵人内匠白馬節会見けるに

車よりゆりの家をいてらりあらまきと摂非違

使のゆくはむともとせまれしと中将みわらいそよ

ひとく云つらいける　女蔵人内匠

大空にてる日の色をいさめても天の下にハ雅かなしむさ

くいそり君れいきく治すなるまじなり

御あれそうるまさしく議で侍くるふかへかひて

おほえ侍けれは　周防内侍

かくしつゝ夕の雲となりもせはあはれかけても誰かしのはん

題しらす　前大僧正慈円

思ひとく世をそむくへきしるへかは数よや我をしらなん

西行法師

数ならぬ身をも心のもちかほにうかれては又帰りきにけり

なかなかに心のひくにまかせてもさてはいかにとつひの思ひ

年月をいかて我身に送りけん昨日見し人けふはなき世に

受かたき人の姿にうかひ出てこりすや誰も又沈むへき

守覚法親王五十首歌よませ侍りける

寂蓮法師

そむきても猶うき物は世なりけり身をはなれたる心ならねは

述懐の心を

身のうさを思ひしらすはいかゝせんいとひなからも猶過しつゝ

前大僧正慈円

何ことをおもふ人そと人とはゝこたへぬさきに袖そぬるへき

法よ色はしらしやおけるまへらをこき身の久さの空

うらゝかて世にふる身にはおほつかな花のちるをも飛そなへき

和哥所にて述懐の心を

山里に契りし庵や荒れぬらんまたれんとたに思はさりしを

右衛門督通具

袖よをく露をハ露としのへとも なれゆく月や色をしるらん

定家朝臣

君か代よあハすハ何を玉の緒の なかくとまてハをしまれし身を

家隆朝臣

大かたの秋の寝覚のなかき夜も 君をそいのる身を思ふとて

わかの浦やおきつしほあひにうかひ出る あハれ我身のよるへしらせよ

その山と契らぬ月も秋風も すゝむる袖よ露こほれつゝ

雅経

君か代よあへるハかりの道ハあれと 身をハたのまぬ行末の雲

皇太后宮大夫俊成

をしむとて涙よ月をとへるかハ あら袖よ秋を恨て

千五百番哥合に　摂政太政大臣

うきしつみこむ世ハさてもいかにそと 心に問てこたへかねぬる

題しらす

我なからこゝろのはてをしらぬかな すてられぬ世の又いとハしき

なかしとも思ひをへハ過にし すきてそ世をやすき

五十首哥よみ侍けるに述懐のこゝろを

守覚法親王

なからへて世よすむかひハなけれとも うきにかへたる命なりけり

権中納言兼宗

世を捨んハ捨てなかりきうき事をしゐておもひし道をも

述懐の心をよみ侍ける

左近中将公衡

捨やらぬ我身そつらききしまにたとふ心に身を任せて
身はしらすも

よみ人不知

うきことしけきはかゝる世に惑ふ心の暮をとゝめかねつゝも

源師光

うれなから捨はしまる命かな後の世とても頼みかけねは

賀茂季保

はかなくも頼む心の行末を思へハ嘆ぬ世にはあらすらん

荒木田長延

はかなくも思へハやかて世中を心とゝめて我身なりけり

入道前関白家百首歌よませ侍けるに

刑部卿頼輔

河舟のよりくる方そなにくそのゝ世を渡る
をもしらすも

大僧正覚弁

老らくの月日はいとゝ早瀬川かへらぬ波にぬるゝ袖かな

続て侍ける百首乃歌を源家長か許よみせよとつかハしけるに書付て侍ける

藤原秀能

かさなれす家をとしにしつむなよ月こそくてもいての

身ののそみかなひ侍らてやしろのまし
らひもせて籠ゐて侍けるにあふひを
見て　　　　　　　鴨長明

見れはまついとゝ涙そもろかつらいかに契てかけはなれけん

題しらす　　　　源季広

おなしくはあれなましかは思出のかへれはとても思はすもかな

西行法師

いつくにもすまれすはたゝすまてあらん柴の庵のしはしなるよ

月の行山に心をおくりいれてやみなるあとの身をいかにせん

五十首哥中に　　前大僧正慈円

うふしとな同人のなかるらんおほきは空に月そさやけき

いかにしていまゝて世には在明のつきせぬ物をいとふ心は

西行法師山里より侍りて昔出家
侍しその月日にあたりて侍なとやし
ける返事に

浮世出し月日の影のめくりきてかはらぬ道を又照すらん

前僧都全真西国のかたに侍ける時つ
かはしける　　　兼仁法親王

人こゝろまことゝそなきと思ふ心をかへりみて月にむかへは今宵

お　大僧正慈円

ほとけしるこれよりしもつかたにて待けりの道

るすに　前右大将頼朝

みちのくのいはてしのふはえそしらぬかきつくしてよつほの石ふみ

世中のよしあしは　大江嘉言

思ふまては人を離て籠にいりけり月みれはよなれとも遠

もしらす　清輔公

花芝の露そおきそふ秋の月いつまてかはきえん待

皇嘉門院

何ゆゑや雲よ杉ふかき葉のあらはそれをもとめてに我身より

権中納言資実

うきことを忍ふかくる菱は遠つましさむかるさそ遠さ

杉の木のやけきるにとして

性空上人

すむ世には雲ゐにゆく世中にはふもと志てそ我外

身はしらす　俊頼朝臣

数ならて世にもあらぬのこれをそしみつと知ともなき身

皇太后宮大夫俊成

うれなからへしそ世をもふけの義やつ遠住吉の雲

春日社歌合に松風といふことを

家隆朝臣

春日山谷の埋木朽ぬとも君につけこせみねの松風

宜秋門院丹後

何となくきけは涙そこほれぬる苔の袂にかよふ松風

双紙よみてなりけることを書てをくり

女御厳子女王

皆人のそむきはてぬる世中にふるの社の身をいかにせん

臨時の祭の舞人にてありけるに侍けるを
りに陪従して後祭日つかはしける

実方朝臣

衣手の山井の水に影見えし猶そのかみの春そ恋しき

返し

道信朝臣

昔への山井の衣なかりせは忘らるゝ身となりやしなまし

後冷泉院御時大嘗会に日かけれはとて実基卿の許につかはすとて
先帝の御ときもおもひいてゝいひつかは
しける

加賀左衛門

立かへりきてもそらにみるまゝに衣ありし昔の形見にも

秋来蓮をやみと云題よみてあまた人々に

おほかたはくれゆくのこりなく(?)郎よそ
のなとはらんとて　天暦御歌
妹かよの鳴くなるなりし人はそかくてさらまほしきと
秋雨を　中務卿具平親王
なかめつゝ我おもふ事は日くらしに軒のしつくのたゆる世もなし
題しらす　小野小町
木枯の風にもみちて人しれすうき言の葉のつもる比哉
能宣朝臣
紅葉の錦にまかふ玉の露をとゝめさらなむ秋の夜の風
述懐百首歌よみ侍りける時
皇太后宮大夫俊成
嵐吹峯の紅葉の日にそへてもろくなりゆく我涙かな
題しらす　崇徳院御歌
ひとりねは萩吹風におとろきとなかき夜もそさむき時
家隆
竹の葉に風吹よはる夕暮の物のあはれは秋としもなし
いつきさふ
夕暮は雲のけしきを見るからになかめしとおもふ心こそあれ
西行法師
暮ぬめりいくかをかくて過ぬらん入あひのかねのつくゝゝとして

まれにつゝ入あはれはゆめ見え夢すゝめもいやかにかきゝえてすゝん

暁の心をよめる　皇太后宮大夫俊成

暁とつけの枕をそはたてゝきくもかなしき鐘の音かな

百首歌中に　式子内親王

暁のゆふつけ鳥そあはれなるなかきねふりをおもふ枕に

たよりあらんと思ひたちけるを人のとゝめ侍けれは　和泉式部

かく斗うきを忍ひてなからへはこれよりまさる物もこそ思へ

題しらす

たらちねのいさめし物をつれ〳〵となかむるをたにとふ人もなき

総聖より参く大僧正のもとにて年来やしなひそて侍けるめのとのりにつかはしける　大僧正行慶

衣きてみしをいつまて世をそむけはやをしへさりけん

百首歌奉し時　土御門内大臣

位山跡をたつねてのほれとも子をおもふ道になほまよひぬる

百首歌よみ侍けるに懐旧歌　皇太后宮大夫俊成

昔たにむかしと思ひしたらちねのなほこひしきそはかなかりける

述懐百首歌よみ侍けるに

俊頼朝臣

ゆゝふめいてくらまて月の雅をとへはあはれなるはなれ

夕暮に蜘蛛のいとはかなけにすかくを常よりもあはれと見て　僧正遍昭

さゝかにの空にすかくもおなしことまたき宿にも幾世かはへん

題しらす　西宮前左大臣

光まつ枝にかゝれる露の命消はてねとや春のつれなき

葉分してつゆよおきされ人をなにとかさ
つけゝるよ　藤原惟成

あきく吹風いかにとゝ宿のゝ小萩かうへをとへのとも

和泉式部みちさたにわすられて後ほとなく敦道親王かよふとききてつかはしける

うつろはてしはし信田の森を見よかへりもそするくすのうら風

返し　和泉式部

秋風はすこく吹とも葛の葉のうらみかほには見えしとそ思

病かきりにおほえ侍りける時定家中将転任のよろこひとて民部て花光かりけれにつかはしけり　皇太后宮大夫俊成

を行く秋風待露の消やらてこのひとことをいひをくかな

題しらす　前大僧正慈円

世中を今はのかきりにおもふしもそむくといへとおしき
世をいとふ心のふかくなりゆけは月日をこそは今
一くにも思ひしりにしはかなさはそむきかてにもいかにせん
何故に世をいとへしといふ人のことのはやもとこもらん
ことわりにさはありなからあはれ世はなほそむかれぬ世に
よしあ

西行法師

世をいとふ名をたにもさはとゝめおきて数ならぬ身の思出にせん
身のうさを思ひしらてややみなましそむくならひのなき世なりせは
いつまてか世にあらんとやと世を捨てゝなかなかやすくすまん
行とにも備る心のかりなれはかへらしとまた世のいとうき

入道前関白太政大臣

昔よりはなれかたさは浮世なるかたみにしのふ中ならねとも
聞くにも捨けりき大学にこりしそ同し
とりのこゝ人家へかへりねなむとやすく見

大僧正行慶

思出てりとしあはれ人をとへいかにとはかりそ定めき世に
捨けり

もらし

数ならぬ身を何故にうらみけんとてもかくても過しける世に

百首歌中に　前大僧正慈円

をろかなるみ山の里はさひしきにあはしとおもひて人はとひけん

題しらす　　俊頼朝臣

うき身には山田のおしねおしこめて世をひたすらに恨侘ぬる

年来修行の心ありけるを捨かたき事侍てすきけるに親なともなくなりて心やすく思ひ立ける比障子に書付ける

山田法師

猿のたれ我かくふこりつゝある庭の種をありつるあとや

題しらす　宗蓮法師

数ならぬ身はなき物になしはてつたかためにかは世をも恨ん

法橋行遍

数ありて今行末を待人や過る月日を惜まさるらん

守覚法親王五十首歌よませ侍けるに

源師光

なからへていけるをいかにもとかましうき身の程をさそと思えそ

題しらす　八条院高倉

浮世をは出る日毎にいとへ共いつかは月の入方をみん

西行法師

情ありし昔のみ猶忍はれてなからへまうき世にもふるかな

清輔朝臣

なからへは又この比や忍はれんうしと見し世そ今は恋しき

寂蓮上人にすゝめて百首歌よませ給ひける
にいさゝか思ひ給て然程に過けるほとに後
小倉山にもおとろへゆき老ともゝのふしそ世
のまゝにうつりぬ摂政家の歌ともかきつきに
し判當徳按三位俊成によみ給て
たところさなかりし歌ともいそきえらひて
てつかはし書うつし小書付給ひけり

西行法師

末の世も此なさけのみかはらすと見し夢なくハよそにきかまし

千載集えらひ給ひける時ふるき人々の歌を
見て

皇太后宮大夫俊成

行末ハ我をもしのふ人やあらん昔をおもふこゝろならひに

西行法師

ねかハくハ花のしたにて春しなんそのきさらきの望月のころ

崇徳院に百首歌奉ける時 [illegible]

世中をおもひつらねてなかむれハむなしき空に消る白雲

百首歌に　式子内親王

くるゝ間もまつへき世かハあたし野の末葉の露に嵐たつなり

津の国にまかりして汀乃あしを見給て

花山院御歌

津の国のなからふへくもあらぬかなみしかきあしの世にこそありけれ

題しらす　　中務卿具平親王

風はやみ荻の葉ことにおく露のおくれさきたつ程のはかなさ

蝉丸

秋風になひくあさちの末毎にをく白露のあはれ世の中

世中はとてもかくてもありぬへし宮もわらやもはてしなけれは

新古今和歌集巻第十九

神祇哥

しるらめやけふの子日の姫小松おひん末まてさかゆへしとは

この哥は日吉社司社のうしろの山にこもりて子日して侍りける夜人の夢にみえけるとなん

なさけなくおる人つらし我宿のあるし忘れぬ梅のたちえを

此哥は建久二年の春の比筑紫へまかりけるものゝ安楽寺の梅をおりて侍りけるよの夢にみえけるとなん

ふたらくの南の岸に堂たてゝ今そさかへん北の藤浪

此寺ハ興福寺乃南円堂つくりたまひ
ける時春日の明神あらはれ給ひてよみ
たまひける哉やふたらくやみなみのきしに堂たてゝ 西風
きみよしの御本尊となん
以来千手九條若丸松そこてひかひきかりあり
この寺ハおゝくの人往昔より信してたのみあかめ
ましめたまふのえれ松やこゝひおもひかる
らんとよみくたまへる流そまつたるらんといひ
むかしよりありがたくいまも世よりいひつたへき
伊勢揚綱よ往昔ふ都寺村おわん

○三十三番
神現形し給ふ加く給ける
いまやくたき草振神をまつまで光を拝
此寺ハ積賀門比壇川大和のさかひ
熊野へ詣けるふ春日へ来つきさりし
道をとりけれとのちふまいりかれ
こひくゆかりあるふけりと悔給たり
德道し給けるとかん
道をたつね雑を遠よりてまゐりしひとをせよ我を忘し
此寺ハ法圓よまゐる人の熊野へ三も
ゆきてかへし新をとゞめて来給けるといふ

しらしらりきれハいまニ度をいふに
せんと歌て御前によみしまりける

秋乃菊よ見てしけるとかん

たふと月にあまる海くなる澱の底よとむを待恨人
この身ハ月の志つめるしくを歌てあつまの
くに人まいりんとひ立けるへ熊野
祈まへよ通夜して待まつ夢にみし
けるとそ

わまたのむ人徒よありてハ又雲分ての祈斗そ
賀茂乃祈とかん

徳みると新しく選しの外れ西京にいつ斗れんとなりしま
是又かりにまりて外る人乃菊なり
見えけりとなん

あつまさつきさ清くみまとしをは清き人のこゝろとよにたゞあや
石清水祈とふり

西の海さへ白波の上ほしてなふにこゝろんかりれ此世を
此方ハ稱德天皇御時和氣清丸を宇
佐の宮よ奉りかへりまつ時詠ぞし
祈けりとなん

延喜六年日本紀竟宴よ非日本盤余集

彦天皇　　大江千古

白浪よ玉より姫のこしとは渚やつゐにとまりなりけん

猨田彦　　紀淑望

久かたの天のやへ雲ふり分てくたりし君を我そむかへし

玉依姫　　三統理平

とひかける天の岩舟尋てそあきつ嶋には宮はしめける

賀茂乃社の午日うたひ侍なる哥

やまとまひをと神に嵐のふかはいつまの浦に舟つなかん

神楽をよみ侍ける

貫之

おく霜に色もかはらぬ榊葉の香をやは人のとめてきつらん

臨時祭をよめる

宮人のすれる衣にゆふたすきかけて心を誰によすらん

大納言に侍ける時勅使にて大神宮にまうてゝよみ侍りける　　摂政太政大臣

神風や御裳濯川のそのかみに契しことの末をたかふな

同時勅使にてまかりてよみ侍ける　　藤原定家朝臣

契ありて今日宮川のゆふかつら長き世まてもかけて頼まん

公継卿勅使にて太神宮に侍りて後のか

つかはしける歌定家の女房の中より申送

りける　読人不知

うき世にも猶いふこゝろあらん人にとはれましかは

思ふらん　善家権大納言公継

神風やいすゞ川波かすしらすすむへき御代に又かへりなん

太神宮の哥中に　太上天皇

詠めや神ちの山に雲消て夕への空をいてん月かけ

神風やとよみてくらになひくしてかけてあふくといふもかしこし

題しらす　西行法師

宮はしらしたつ岩ねにしきたてゝ露もくもらぬ日の御影かな

神ち山月さやかなる誓ありて天の下をはてらすなりけり

伊勢の月よみの社にまゐりて月を見てよみ侍る

さやかなるわしの高根の雲井より影やはらくる月よみの森

神祇哥とてよみ侍ける

前大僧正慈円

やはらくる光にあまる影なれやいすゞ河原の秋の夜の月

公継勅使にて下り侍りけるにいちしのむまやに

てよみ侍る　中院入道右大臣

立かへり又もみまくのほしきかなみもすそ川のせゝの白浪

入道前関白家百首哥よみ侍けるに

皇太后宮大夫俊成

神風やいすゝの川の宮柱いく千代すめとたてそめけん

俊恵法師

神風や玉くしの葉をとりかさしうちとの宮に君をこそいのれ

五十首歌奉りし時

越前

神風や山田の原の榊葉に心のしめをかけぬ日そなき

社頭納涼といふことを

大中臣明親

いすゝ川そらやまたきに秋の声したつ岩ねの松の夕風

香椎宮の杉をよみ侍りける

読人しらす

千早振香椎の宮のあや杉は神のみそきにたてるなりけり

八幡宮の権官にて年久しかりけるをうらみて御神楽の夜まゐりて榊に結ひ付侍ける

法印成清

榊葉にそのいふかひはなけれとも神に心をかけぬまそなき

賀茂にまゐりて

周防内侍

としへてうき影をみたらしのかゝる世とはきみそしるらん
文治六年女御入内の屏風に臨時の祭
かけるところをよみ侍ける
皇太后宮大夫俊成
月さゆるみたらし川に影みえて氷にすれる山あゐの袖
社頭雪といふことをよみ侍ける
按察使公通
ゆふしての風にみたるゝ音さえて庭白たへに雪そつもれる
十首歌合の中に神祇をよめる
前大僧正慈円
君をいのる心の色を人とはゝたゝすの宮のあけの玉かき
見あまたによまりて社のつかさのく
かものひとをうけけるによめる
賀茂重保
けふまつる神にあふひのなかりせは何にたのみをかけてまし
社司ともまゐに来て歌よみし侍ける
ついてによめる
賀茂幸平
あまの田のかきねにせきをせきいれてなかれてにおちし石川の水
鴨社歌合とて人々よみ侍けるに月を
鴨長明

石川やせみの小川の清けれハ月もなかれをたつねてそすむ

弁に侍ける時春日の祭にまかりて周
防内侍のもとへつかハしける

中納言資仲

万代をいのりそかくるゆふたすき春日の山のみねの嵐に

文治六年女御入内屏風に春日祭

入道前関白太政大臣

けふまつる神のこゝろやなひくらんしてに波たつさほの川かせ

家に百首歌よみ侍ける時神祇のこゝろを

天の下みかさの山の陰ならてたのむかたなき身とハしらすや

皇太后宮大夫俊成

春日のゝおとろの道のむもれ水末たに神のしるしあらハせ

大原野祭にまいりて周防内侍につかハしける

藤原伊家

千世まてもこゝろしてふけもみちはを神もをしほの山おろしの風

最勝四天王院の障子によしの山書たる所

前大僧正慈円

なしかさ山神のちかひと松の葉に契し色ハかはるものかハ

日吉の社に奉ける歌の中に二首を

やハらくる影そ麓にくもりなき本の光ハみねにすめとも

述懐を

わたのむなしき枕の中に夢さめても出のなかにへも か

みしかへて日吉の影はかりねに波をやしきいつきか

結への願ひをこれは浦風に心もしきこえてみゆとも

小野によりて奉る

見ぬ世をはおもひあはせて春をそ鳴ん法しのいのりの身

熊野へまうして給ひける時に花のさかり

なりけるを御覧して

白川院御哥

咲匂ふ花のけしきをみるからに神の心そ空にしらるる

熊野にまゐりて奉給ひし

花山天皇

岩にむす苔ふみならすみ熊野の山のかひある行末もかな

新宮に詣とて熊野川にて

熊野川くたすはやせのみなれさをさすかみなれぬ浪のかよひち

白川院熊野に詣て給へりけるに御ともの人々しかのやれ王子にて哥よみ侍りけるに

徳大寺左大臣

立のほるしほやの煙うら風になひくを神の心ともかな

熊野へまうして侍しに岩代の王子にて

名なくて書付させて左近仲し小拝殿のか
きしに書付しける　　読人しらす

石志み乃神は郊乃んしみ乃世よ新むしき世風霞の引来
継登の本多やまそ千のちらよ遷宮給
しにまゐりて　　村上天皇

契あれハ嬉しきかゝるおりにあひぬ忘るな神も引末の空

加賀守にて侍けるとき白山に詣たりけるを
おもひいてゝ日吉の客人の宮にてよみ侍
ける　　左京大夫あきすけ

年ふともこし乃白山忘れすハかしらの雪をあはれとも見よ

一品聡子内親王すみよしにまゐりて
人々歌よみ侍けるに　　藤原道経

住吉乃濱松かえに風ふけハ波の志らゆふかけぬまそなき（あさき）

ある所の屏風乃絵に十一月神祭る家の
まへにうまにのりて人の行所を

能宣朝臣

榊葉の霜うちはらひかれすのみすめとそ祈る神の御前に

延喜御時屏風に夜神楽のところよみ侍
ける　　貫之

河社しのにおりはへほす衣いかにほせはか七日ひさらん

奉幣使にて住吉に参て昔住ける
所の荒たりけるを見てよみ侍りける

津守有基

住吉と思ひし宿はあれにけり神のしるしを待とせしまに

新古今和歌集巻第二十

釈教歌

なをたのめしめちか原のさせも草我世中にあらん限は

なにかおもふなにかなけかん世中はたゝ朝顔の花の上の露

此ふた歌は清水観音の御歌となむ
いひつたへたる

智縁上人伯耆の大山に参て出なん
としける暁の夢にみえける歌

山ふかくとしふる我もある物をいつちか月の出てゆくらん

難波のみつのてらにてあしのはのそよくを

こゝて　行基菩薩

おそらしかせのみちはいつまてか浮世中にまよひ給はん

比叡山中堂建立の時　伝教大師

阿耨多羅三藐三菩提の仏達わかたつ杣に冥加あらせ給へ

入唐時哥　智証大師

法の舟さして行身そもろ〳〵の神も仏も我をみそなへ

菩提寺の講堂の柱にむしのくひたりける哥

しるへある時にたにゆけ極楽の道にまよへる世中の人

三たけの笙の岩屋にこもりてよめる

日蔵上人

寂寞の苔の岩戸のしつけさに涙の雨のふらぬ日そなき　あき

臨終正念ならんことをおもひてよめる

法円上人

南無阿弥陀仏の御手にかくる糸のおはりみたれぬ心ともかな　ふ

題しらす　僧都源信

我たにもまつ極楽にむまれなはしるもしらぬもみなむかへてむ

天王寺の亀井の水を御らんして

上東門院

濁らぬ亀井の水をむすひあけて心のちりをすゝきつるかな

法花経廿八品の人々によませ侍けるに提婆

品の心を　法成寺入道前摂政太政大臣

わたつ海の底よりきたる程もなくこの身なからに身をそさとれる

勧持品乃心を　大納言斉信

数ならぬ命はなにかおしからん法とく程をしのふはかりそ

五月許に雲林院の菩提講にまうてゝ

よみ侍ける　肥後

紫の雲の林をみわたせは法にあふちの花咲にけり

涅槃経よみ侍ける時蓮にちる花を池の水

色とけぬや花吹ちらす春風の空と出

て人のみを待けれとも蓮のうちに在て

とおもひける哉

谷川のなかれし清くすみぬれはくまなき月の影もうかひぬ

述懐の歌中に　前大僧正慈円

ねかはくはしはしやみちにやすらひてかゝけやせまし法の灯

とにかくに法をはきくの白露のよるへとさてつゆめてきえんとそ思ふ

極楽へまうてんゆきつする人のおもひの遠にまれ

観心如月輪若在軽霧中の心を

権僧正公胤

我心猶晴やらぬ秋霧にほのかにみゆる有明の月

家に百首歌よみ侍ける時十楽の心
をよみ侍けるに縁覚の心を

摂政太政大臣

おく山に独うき世はさとりにき常なき色を風になか
めて

心経の心をよめる

小侍従

色にのみそめし心のくやしきをむなしとときし法のうれしさ

摂政太政大臣家百首歌に十楽の心
をよみ侍けるに聖衆来迎楽

寂蓮法師

紫の雲ちにさそふことの音に浮世をはらふ峯の松風

蓮花初開楽

これやこの浮世のほかの春ならん花のとほその曙の空

快楽不退楽

春秋もかきらぬ花にをく露はをくれさきたつ恨やはある

引摂結縁楽

立かへりくるしき海にをく網もふかき江にこそ心ひくらめ

法花廿八品歌よみ侍けるに方便品唯有
一乗法のこゝろを

前大僧正慈円

いつくにも我法ならぬ法やあると空吹風にとへとこたへぬ

化城喩品　化作大城郭

とふ家よ浮世の中を出やらぬ人も宿ハありけり

分別功徳品　武住不退地

鷲乃山みふきく法のためにてそつね宿よ行人そなき

普門品　心念不空過

なにとてもむなしきことゝ思ひよ放ちやりてし紫の雲

水清常不満と云心を　崇徳院御製

そこなへてうき身ハ清きみつのみそ見ちひもせぬ心のうちハ

先照高山

朝日さす峰乃法よこゝろめてめ九重の霞よ遠き谷の陰草

家よ百首乃ひとりみ侍けるの時五智乃心を

妙観察智　入道前関白太政大臣

底きよくこゝろのみをよ流すハいつてかさなりなかれすむらん

勧持品　正三位経家

法すてゝいのちをしいハやさしく法のためにハ命をしまん

法師不加刀杖瓦石　念仏故應忍ムと

寂蓮法師

始ぬ世乃ミちをつ心よ着せハ浮世をのかれの思ひこそたり

五百弟子品　内秘菩薩行の心を

前大僧正慈圓

いはほの床なく蟹の唐小とんの月かゝりさをとり
人くもとめて清き百千とをみ結けるか
二乗但空智如螢火
寂蓮法師
なつの夜は螢とともにへてひかりそ出つゝやみぬる
菩薩清涼月遊於畢竟空
雲晴てむなしき空にすみなから浮世中とめくる月哉
栴檀香風悦可衆心
吹風に花たちはなやにほふらん昔おほゆるきふの庭哉
作是教已復至他國

やまふかき木の葉毎に契おきて朝立霜の露けさ
此日已過 命即衰減
きのふ過今日もくれぬとおもひつゝ入おひの身こそかなしき
悲鳴幻明 痛慈本群
素覚法師
草ふかきさとりのかとのとを出て友まつ庵そ忍ぶる
棄恩入無為 寂蓮法師
そむきすていつまての世にふる身そとおもひいりにし人にまかせん
合会有別離 源季廣
あひそめしみをよわりて白雲のかゝる此世のいとひさき哉

聞名欲往生　寂蓮法師

音にきく君かりいつかいきの松まつらんものを心つくしに

心懐戀慕　渇仰於佛

別れにしその面影の恋しきに夢にもみえよ山のはの月

十戒哥よみ侍りけるに

不殺生戒

わたつみのふかきにしつむいさりせてたもつかひある法をもとめよ

不偸盗戒

萍の一葉なりとも礒かくれおもひなかけそおきつ白浪

不邪婬戒

さらぬたにおもきか上のさよ衣わかつまならぬ妻なかさねそ

不酤酒戒

花の下露のなさけは程もあらし酔ひなすゝめそ春の山風

入道前関白家に十如是哥よませ侍りけるに

如是報　　二条院さぬき

うきも猶昔のゆへと思はすはいかにこの世を恨はてまし

待賢門院中納言人々にすゝめて二十八品の哥よませけるに序品広度諸衆生其数無有量のこゝろを

皇太后宮大夫俊成

後よへき数をしらぬ橋柱いつかならてまちわたらん

永福門院にて極楽六時讃の絵ように御
つきさ奉りしへきよし給けるによみ給
寅の時よ大衆法をときて弥勒出瞻
仰せむ

今そこれ入日をみても思ひこし弥陀の御国乃夕暮の空

暁到て彼の意全きさしによすると
いにしへの彼の代縁よ結ふかきしらぬ彼の暁の急
百千万中に毎日晨朝入禅定のこゝろを
式子内親王

しるへする暁毎にみかる世はつまくこふるよ風萎そうさ

發心和歌集序　普門品
種々諸悪趣　選子内親王

逢ことをいつかそのよと契つき浮身はゆふ方を志らねは
五百弟子品のこゝろを
僧都源信

玉かけし衣のうらをかへしてそおろかなりけるこゝろをはしる
維摩経十喩中に此身如夢といふこゝろを
赤染衛門

夢やゆめうつゝや夢とわかぬかないかなる世にか覚めんとすらん
二月十五日の暮かたに伊勢大輔かもとに

つかはしける　[illegible]

常よりもけふの煙のたよりにや西をはるかに思ひやるらん

伊勢大輔

返し

思ひいつく波よりもまた西の山のはに入日のかけをなかめて

依釋迦遺教念弥陀といふ心を

肥後

をしへをきて入にし月のなかりせはいかて心を西にかけまし

西行法師をよひ侍けるにまかるへきよしは申なから

まうてこて月のあかゝりけるに

門の前をとをるときゝてつかはしける

待賢門院堀河

西へ行しるへとおもふ月かけのそらたのめこそかひなかりけれ

返し

西行法師

立出て（いらて）雲まをわけし月かけはまたぬけしきやそらにみえけん

人の身まかりける後結縁経供養しけるに

即往安楽世界のこゝろを

瞻西上人

昔みし月の光をしるへにてこよひや君か西へ行らん

観心をよみ侍ける

西行法師

やみはれて心の空にすむ月は西の山へや
ちかくなるらん